野坂遺跡

NTT DoCoMo
鳥取野坂基地局基礎設備工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2006. 3

財団法人　鳥取市文化財団

野 坂 遺 跡

NTT DoCoMo
鳥取野坂基地局基礎設備工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2006. 3

財団法人　**鳥取市文化財団**

序　　文

鳥取市は、鳥取県の県庁所在地として、また、山陰地方の中核都市として発展してきた、人口20万人あまりを擁する地方都市です。

鳥取市内には、鳥取平野をはじめその周辺丘陵に、数多くの遺跡が存在しています。これらの埋蔵文化財は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、財団法人鳥取市文化財団では、開発と文化財の共存をはかるべく、各関係機関の協力を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めています。

さて、今回実施した野坂遺跡の調査は、携帯電話基地局基礎設備工事に伴う発掘調査として、平成17年８月から調査を行ってきました。調査の結果、平安時代を中心とした時期の貴重な遺構、遺物が検出され、当地域の古代文化の一端を明らかにする資料を提供することができました。ささやかな冊子ではありますが、市民各位ならびに関係各位の埋蔵文化財の理解に供していただければ幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ関係各位の方々に、心から感謝申し上げます。

平成18年３月

財団法人　鳥取市文化財団
理 事 長　小　谷　荘太郎

例　　言

1．本書は、NTT DoCoMo鳥取野坂基地局基礎設備工事の事前調査として実施した野坂遺跡の発掘調査報告書である。
2．本発掘調査は、NTT DoCoMo中国の委託を受けて、財団法人鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財センターが、平成17年度に現地調査および報告書を作成した。
3．発掘調査を実施した遺跡の所在地は、鳥取市野坂字欠谷377番１である。
4．発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
5．現地実測、図面の作成は、調査参加者全員の協力のもとに行い、出土遺物の整理および遺物実測、図面の浄書、観察表の作成は、神谷伊鈴、下多みゆき、濱橋博子を中心として行なった。
6．本書の執筆、編集は、藤本隆之が行なった。
7．現地調査から報告書作成にいたるまで、以下に列記している多くの方々からの指導、助言ならびに協力をいただき、厚く感謝いたします。(順不同、敬称略)
NTT DoCoMo中国、株式会社 熊谷組

凡　　例

1．本報告書における遺構図の方位はすべて磁北を示し、レベルは海抜標高である。
2．本報告書では、現地調査時の番号をそのまま使用している。番号は遺構の種別に関係なく、通し番号となっている。
3．本書に使用した遺構等の略号等は次のとおりである。
SB：掘立柱建物、SK：土坑、SD：溝状遺構、P：柱穴・ピット、////：石
4．今回の調査によって出土した遺物は、遺跡名、調査年度、調査区、遺構番号、取上げ順による遺物番号(遺物台帳登録番号)、取上げ年月日を基本的に注記している。写真や図面などの記録類も同様である。

遺構番号対応表

試掘調査	本 調 査
P－01	109
P－02	110
P－03	135
P－04	—
P－05	113
P－06	136
P－07	108

本 文 目 次

序文・例言
第１章　発掘調査の経緯
　　Ⅰ．発掘調査に至る経緯……1
　　Ⅱ．発掘調査の経過……1
　　Ⅲ．調査の組織・体制……1

第２章　調査の結果
　　Ⅰ．遺跡の位置と環境……3
　　Ⅱ．基本層序……3
　　Ⅲ．検出遺構……3
　　Ⅳ．出土遺物……14
　　Ⅴ．まとめにかえて……15
出土遺物観察表……16
写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　調査位置図……2
第２図　野坂遺跡周辺遺跡分布図……4
第３図　野坂遺跡全体図……5・6
第４図　調査地断面図……7
第５図　SB－01実測図……8
第６図　SB－02実測図……9
第７図　SB－03実測図……10
第８図　SB－04実測図……11
第９図　SB－01出土遺物実測図……12
第10図　SB－03出土遺物実測図……12
第11図　SD－065実測図……12
第12図　P－024実測図……12
第13図　ピット内出土遺物実測図……13
第14図　遺構外出土遺物実測図……15

写 真 図 版

図版１……調査地遠景(南西から)
調査前(西から)
表土除去作業(東から)
図版２……西壁断面(南東から)
南壁断面(北西から)
南壁断面(北東から)
図版３……調査地全景(南から)
調査地全景(西から)
調査地全景(東から)
図版４……SB－01(南から)
SB－01、Ｐ－044断面(西から)
SB－01、Ｐ－099断面(南から)
図版５……SB－01、Ｐ－115断面(東から)
SB－01、Ｐ－076完掘状況(南東から)
SB－01、Ｐ－125・126完掘状況
(東から)
図版６……SB－02(南から)
SB－02、Ｐ－011断面(南から)
SB－02、Ｐ－013断面(南から)
図版７……SB－02、Ｐ－015断面(西から)
SB－02、Ｐ－061断面(東から)
SB－02、Ｐ－055断面(南東から)
図版８……SB－02、Ｐ－058～060断面(南から)
SB－02、Ｐ－041～043完掘状況
(南東から)
SB－02、Ｐ－058～060完掘状況
(南から)
図版９……SB－03(南から)
SB－03、Ｐ－064断面(東から)
SB－04、Ｐ－001断面(南から)
図版10……SB－04、Ｐ－035断面(北から)
Ｐ－024遺物出土状況(東から)
SD－065断面(西から)
図版11……Ｐ－007断面(北から)
Ｐ－054断面(南から)
Ｐ－047～050断面(南から)
図版12……Ｐ－093・130・092断面(東から)
Ｐ－095断面(南東から)
Ｐ－119断面(北から)
図版13……SB－01(Ｐ－112)出土遺物
SB－03(Ｐ－066)出土遺物
Ｐ－024出土遺物
Ｐ－118出土遺物①
図版14……Ｐ－118出土遺物②
遺構外出土遺物①
図版15……遺構外出土遺物②

第１章　発掘調査の経緯

Ⅰ．発掘調査に至る経緯

今回の発掘調査の契機となった携帯電話基地局基礎設備工事事業は、野坂字欠谷で計画されており、工事区域は基礎埋設による掘削にて原地形を大きく改変することとなる。工事予定範囲では既存の遺跡地図等により遺物散布地が含まれていることから、遺跡の範囲、遺構、遺物の有無と埋蔵状況、遺跡の性格等を把握する目的で鳥取市教育委員会が平成17年５月に試掘調査を実施した。調査の結果、今回の工事予定地には古代から中世期を主とした遺構、遺物が多数確認された。鳥取市教育委員会はこれらの試掘結果をもとに、関係機関との計画変更等を含め種々の協議を行ったが、現状での遺跡の保護、保存は難しく、記録保存で対応することとなった。

Ⅱ．発掘調査の経過（第１図）

野坂遺跡の発掘調査は、NTT　DoCoMo中国の委託を受け鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財センターが調査を実施した。

現地調査は資材搬入などの調査準備の後、平成17年８月から開始した。表土除去については調査の迅速化を図るため、遺構・遺物に影響の無い範囲で重機を用いた。測量杭の設置は任意のラインを基準として、直交する基準杭を遺構の密度に応じて適宜設置した。降雨による調査地の冠水、水没を防止するため南（谷）側に排水溝を設置して排水を可能にした。検出した各遺構、遺物の写真撮影や実測等の記録類の作成は適宜行った。また、完掘後には高所作業車にて全体の写真撮影を行った。調査の結果、遺構は古代（奈良・平安時代）期に比定され、多少の時期幅はあるが、全て同一面において検出している。検出した遺構は掘立柱建物など明らかに生活痕跡であり、土器などの遺物も５コンテナケース余り出土しており、集落跡として評価できる。検出した遺構は、ピット（柱穴）を主として総数136を数え、最終的な調査面積は146㎡である。

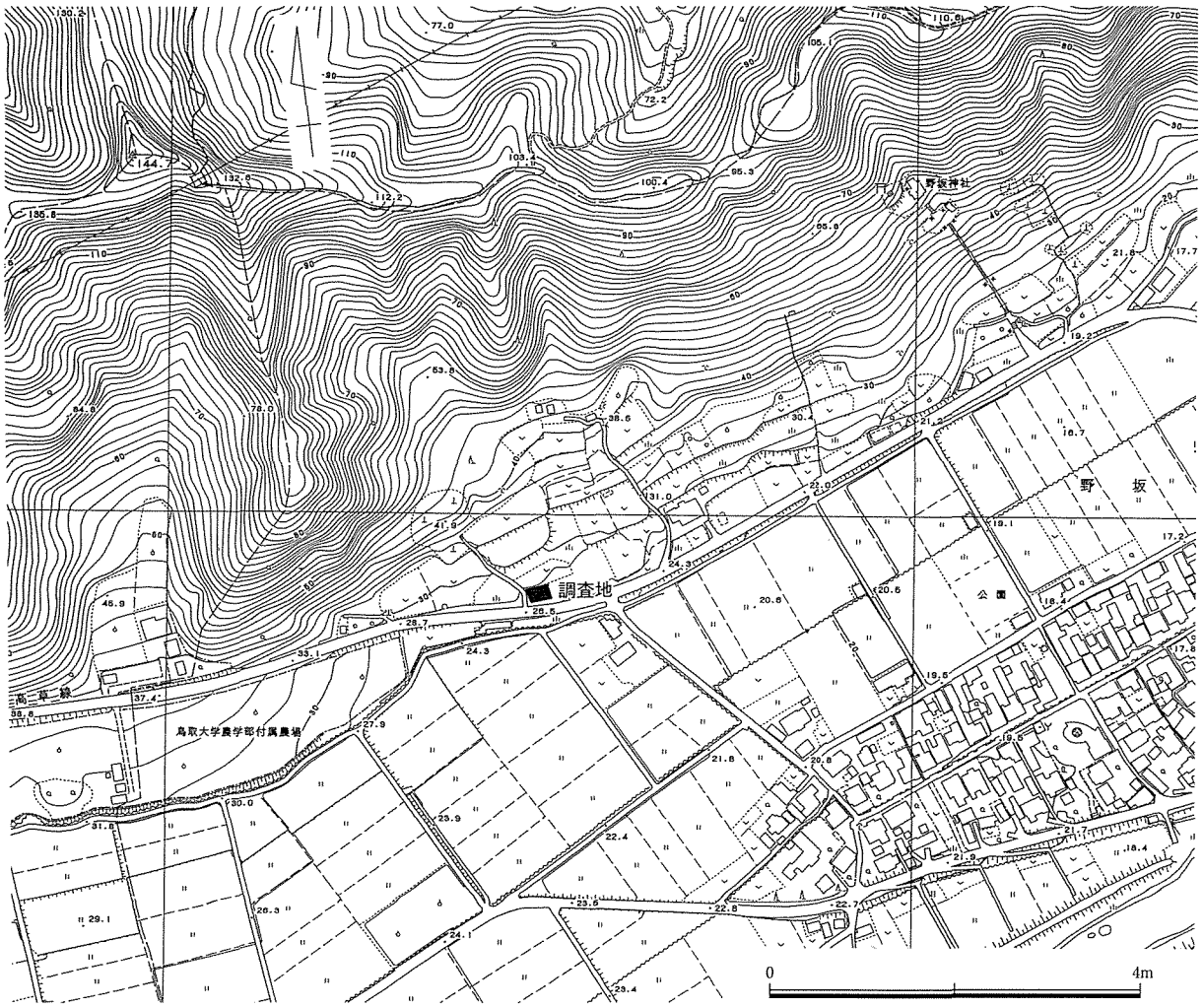
現地調査は関係者の協力により予定どおり８月末に終了した。出土した遺物と写真や図面などの記録類の整理は現地調査と並行して進め、遺物については、水洗い等の後、注記、復元作業を行なった。現地調査終了後、本格的に整理作業、報告書作成を行い、平成18年３月末に終了した。

Ⅲ．調査の組織・体制

発掘調査の組織、体制は以下のとおりである。

平成17年度	調査主体	財団法人　鳥取市文化財団	
	理事長	林　由紀子（鳥取市副市長）	平成17年４月～平成17年10月
		小谷荘太郎	平成17年11月～
	副理事長	中川　俊隆（鳥取市教育長）	平成17年４月～平成17年10月
		三田三香子	
		住田　高市	平成17年11月～
	常務理事	小谷荘太郎（兼務）	
	調査指導	鳥取市教育委員会　文化財課	
	事務局	財団法人　鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財センター	
		所　　長　　前田　　均	
		主　　幹　　藤本　隆之	
		調査事務　　秋田　澄世	

調 査 担 当　　財団法人　鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財センター
調　査　員　　藤本　隆之
調査補助員　　濱橋　博子



第１図　調査位置図

第２章　調査の結果

Ⅰ．遺跡の位置と環境（第１・２図、図版１）

野坂遺跡は、JR鳥取駅より西南西へ5.2kmの野坂に所在する。北西、南東側を丘陵に挟まれた谷部に位置しており、谷部中央には野坂川が流れ千代川へと注ぐ。遺跡は野坂川左岸、野坂集落の北西側、丘陵裾の段丘上田畑に存在する。昭和52年の分布調査において、弥生・古墳時代の遺物の散布が確認されている。

近隣には、野坂川を挟んだ南東側丘陵裾に小森山遺跡、下段遺跡、北東1.5kmの谷平野部には大桷遺跡などが存在する。昭和52年の分布調査において、小森山遺跡は奈良・平安時代、下段遺跡は弥生・古墳時代の遺物の散布地として確認されている。大桷遺跡は昭和51年、圃場整備事業中に発見され、昭和52・57年には道路整備に伴い発掘調査が実施されている。弥生時代中期から奈良時代の複合遺跡で竪穴式住居、掘立柱建物、土坑、溝状遺構が確認されている。

また、地元の方々の話では、調査地の北東約70mには明治期の古窯跡、山麓一帯には粘土採掘跡があったという。いずれも現在では竹林や畑になっているが、窯跡が存在したとみられる場所には現在でも陶器片や窯道具が散乱している。

Ⅱ．基本層序（第４図、図版２）

調査地は段丘上であり、緩斜面である。標高は26.9～27.5m。本来は南側の野坂川に向かい約８°の傾斜を有していたと考えられるが、果樹園や畑地として利用するために上位側を削平、下位側に盛土（客土）して平坦地を造っている。

地表から８～20cm程度の厚さの表土（明褐色砂混粘質土10YR3/3）が覆う。表土下には０～45cm以上の褐色・黒褐色粘質土または褐色・黒褐色砂混粘質土10YR4/4～2/1が遺物包含層として存在していたと考えられるが、内包される遺物は細片であること、基盤層と考えられる黄褐色粘質土10YR5/6～6/6のブロックを含むことから、客土などの二次堆積層である可能性が高い。さらに、谷（下位）側には表土直下に20～60cm程度の客土が認められ、空缶やガラス瓶、ビニールが含まれることなどから、近年の客土と考えられる。遺構面は第５層の黒色粘質土7.5YR1.7/1と考えられ、僅かではあるが土器細片を含む。遺構面の標高は25.9～27.15mである。山（上位）側が削平されていることを考慮すれば、断定はできないが、基盤層である黄褐色粘質土10YR5/6～6/6も遺構面である可能性がある。また、当遺跡の黒色系の土層は総体的に黒色が強いのが特徴であり、火山灰系の土質である可能性もある。近隣では大山クロボクが著名であり、当地も同様の土壌であろうか。

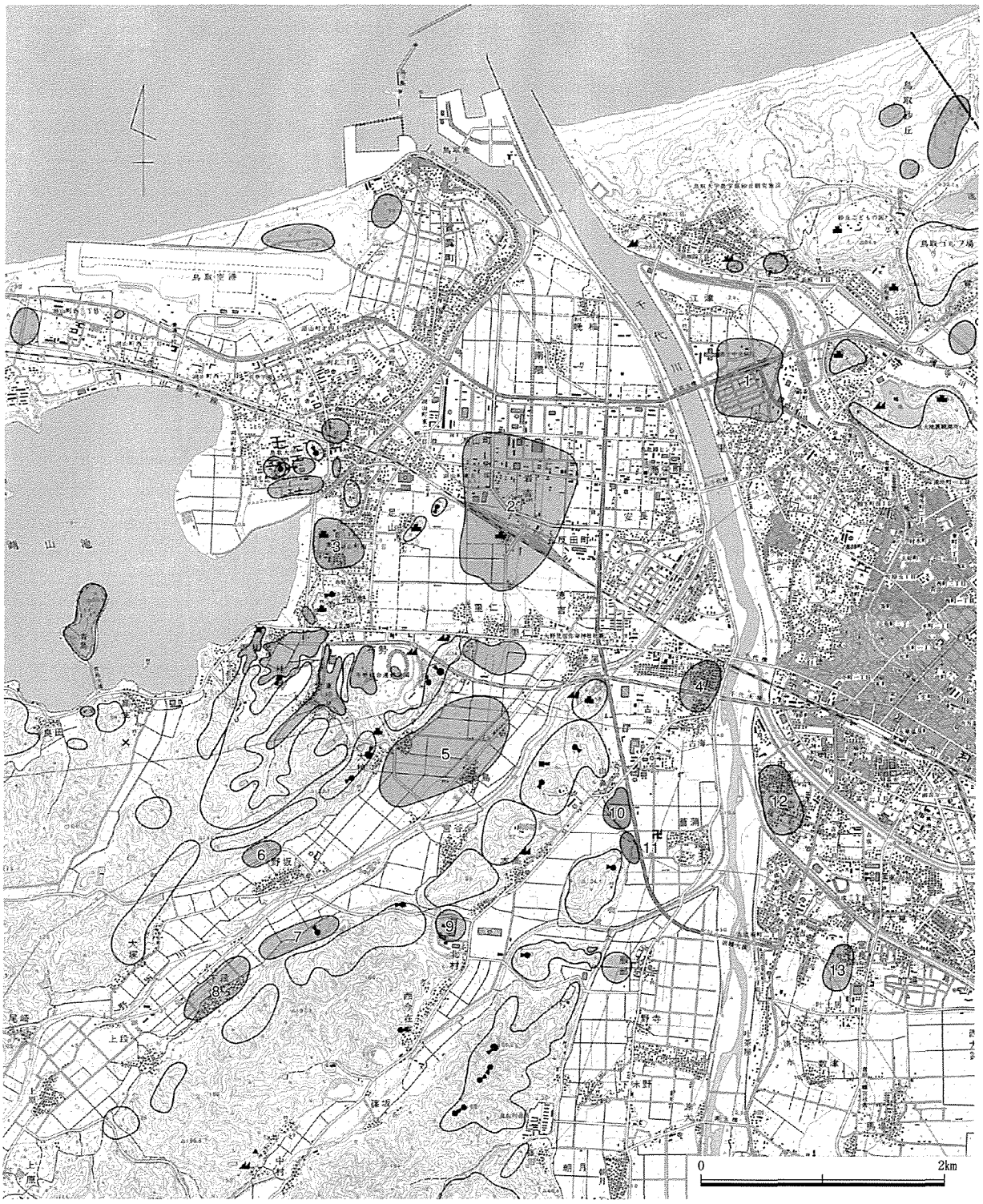
Ⅲ．検出遺構（第３図、図版３～12）

検出した遺構は、総数136である。内、５は撹乱である。調査地の南半東寄りには、幅1.3～1.8m、長さ8.8mの大きな撹乱溝が存在する。一部の断割りを試みたが、側面の崩落が著しく底面を確認することはできなかった。２m以上の深さがあると考えられる。

大半の遺構はピット（柱穴）であるが、溝状遺構、また耕作痕と考えられるものも存在する。耕作痕等についても全体図に掲載はしているが、説明は割愛することとした。概ね、北（山）側の規模の大きな不整形の遺構は耕作痕と理解して大過無い。

１．掘立柱建物

今回の調査で確認した掘立柱建物は４棟である。調査地が狭小ゆえに何れも規模は確定できない。すべての建物の主軸は５°の範囲内に収まる。SB－02と04は重複すること、主軸と柱穴の形状からSB－01



1．秋里遺跡
2．岩吉遺跡
3．天神山遺跡
4．古海遺跡
5．大桷遺跡
6．野坂遺跡
7．小森山遺跡
8．下段遺跡
9．北村恵儀谷遺跡
10．山ヶ鼻遺跡
11．菖浦遺跡
12．古市遺跡
13．宮長竹ヶ鼻遺跡

—凡例—

集落遺跡、遺物散布地

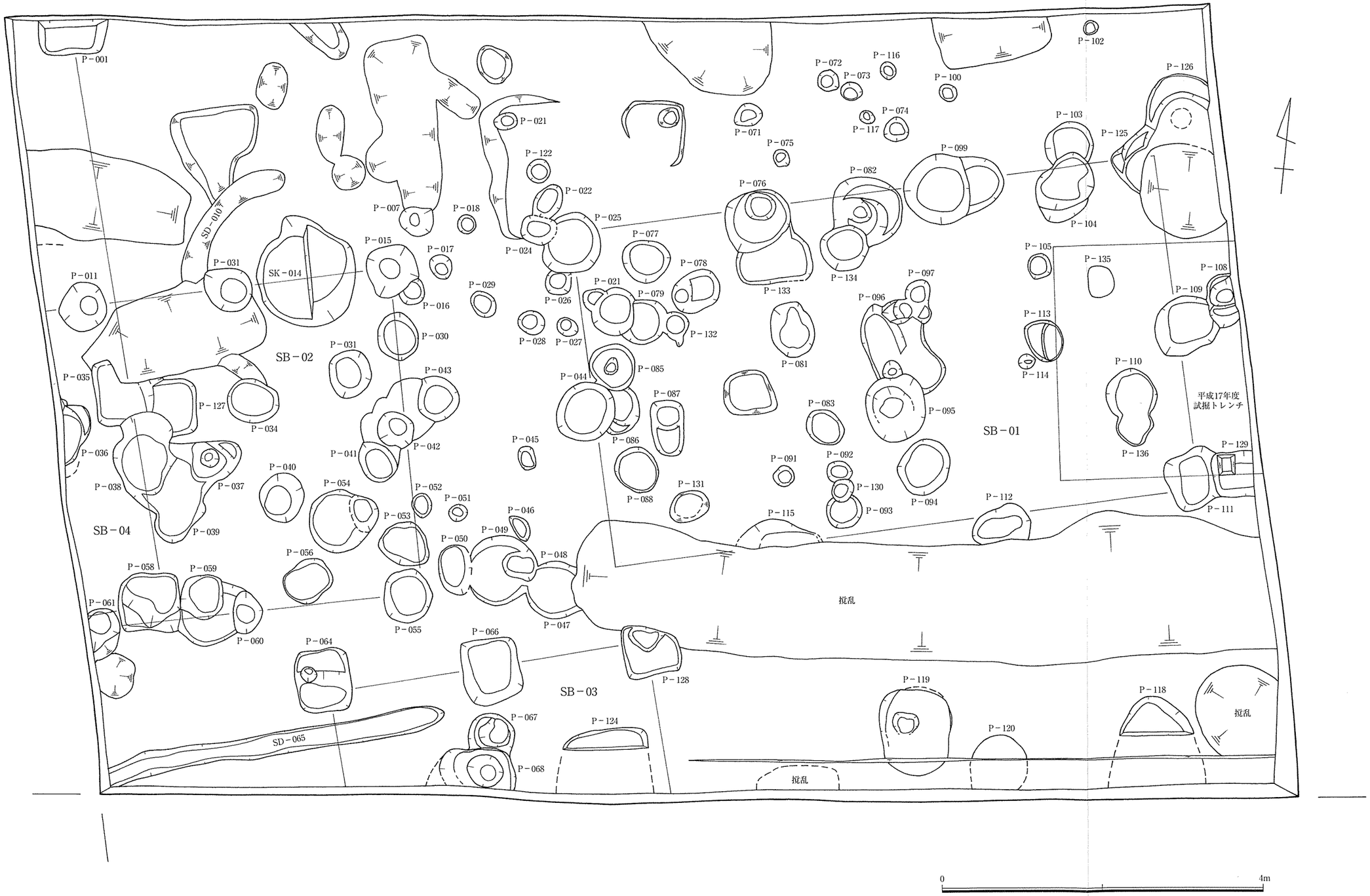
墳墓群、古墳群

主要古墳

横穴

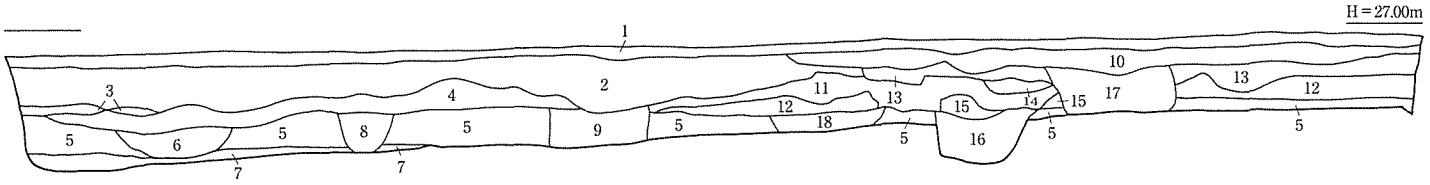
城跡

第２図　野坂遺跡周辺遺跡分布図

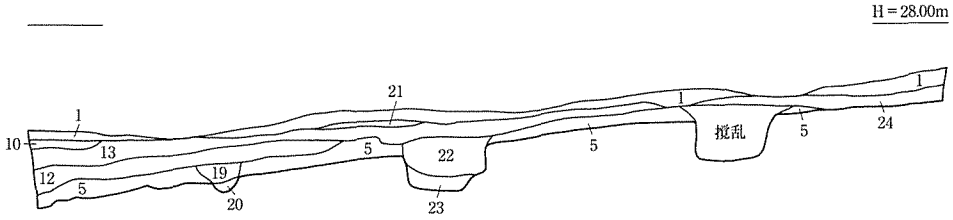

SB－01
SB－02
SB－03
SB－04
SK－014
SD－010
SD－065
平成17年度
試掘トレンチ
撹乱
撹乱
撹乱
P－001
P－007
P－011
P－015
P－016
P－017
P－018
P－021
P－022
P－024
P－025
P－026
P－027
P－028
P－029
P－030
P－031
P－034
P－035
P－036
P－037
P－038
P－039
P－040
P－041
P－042
P－043
P－044
P－045
P－046
P－047
P－048
P－049
P－050
P－051
P－052
P－053
P－054
P－055
P－056
P－058
P－059
P－060
P－061
P－064
P－066
P－067
P－068
P－071
P－072
P－073
P－074
P－075
P－076
P－077
P－078
P－079
P－081
P－082
P－083
P－085
P－086
P－087
P－088
P－091
P－092
P－093
P－094
P－095
P－096
P－097
P－099
P－100
P－102
P－103
P－104
P－105
P－108
P－109
P－110
P－111
P－112
P－113
P－114
P－115
P－116
P－117
P－118
P－119
P－120
P－122
P－124
P－125
P－126
P－127
P－128
P－129
P－130
P－131
P－132
P－133
P－134
P－135
P－136
0
4m

第３図　野坂遺跡全体図

南壁断面

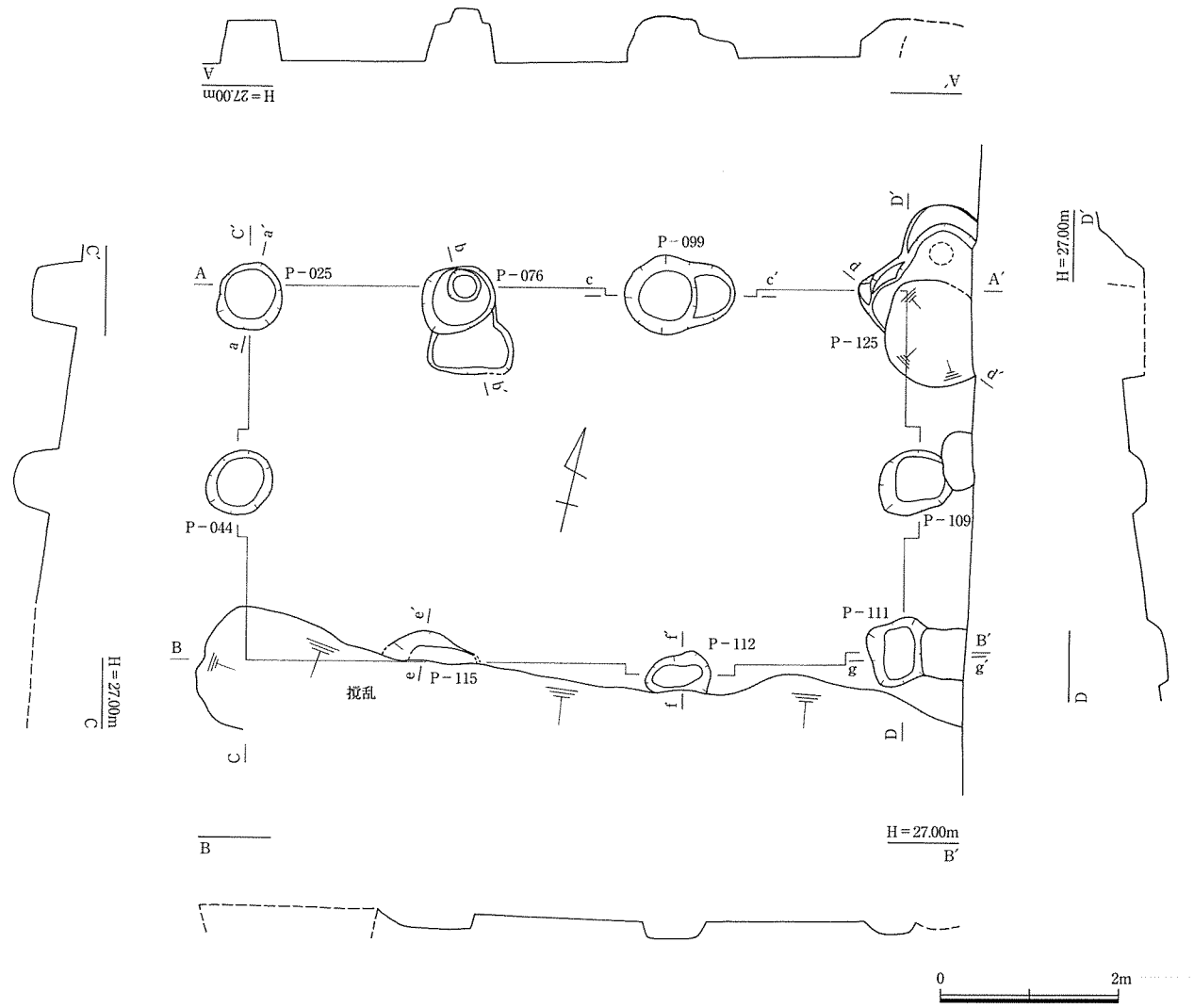


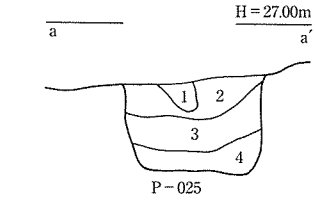
西壁断面



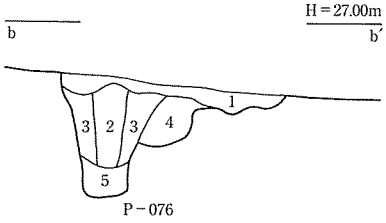
1．暗褐色砂混粘質土　10YR3/3
2．黄褐色粘質シルト　10YR5/6(褐色砂質土10YR4/6ブロック20%、黒色粘質土10YR1.7/1ブロック40%含)
3．暗褐色粘質土　10YR3/3～2/3
4．黒褐色粘質土　10YR2/2(褐色を帯びる、土器細片１%含)
5．黒色粘質土　10YR1.7/1(僅かに土器細片含)
6．黒褐色砂混粘質土　10YR2/2
7．黄褐色砂質土　10YR5/6
8．黒褐色砂混粘質土　10YR3/1～2/1
9．灰黄褐色砂混粘質土　10YR4/2～3/2
10．黒褐色砂混粘質土　10YR3/2(黄褐色粘質土10YR6/6ブロック３%含)
11．黒褐色砂混粘質土　10YR2/2(灰色を帯びる、土器細片１%以下含)
12．黒色砂混粘質土　10YR2/1(土器細片僅かに含)
13．黒色砂混粘質土　10YR2/1(黒色粘質土10YR2/2ブロック30%含)
14．黒色粘質土　10YR2/1
15．黒褐色砂混粘質土　10YR2/2～2/1
16．黒褐色砂混粘質土　10YR2/2(黒色を帯びる　黄褐色粘質土10YR5/6ブロック３%含)
17．黒褐色砂混粘質土　10YR2/3
18．黒褐色砂混粘質土　10YR2/2～2/1(明黄褐色粘質土10YR6/6ブロック７%含)
19．黒色粘質土　10YR2/1
20．黒色粘質土　10YR2/1(黄褐色粘質土10YR5/6ブロック３%含)
21．灰黄褐色砂混粘質土　10YR4/2(黄褐色粘質土10YR5/6ブロック５%含)
22．黒色粘質土　10YR1.7/1(明褐色粘質土10YR6/6ブロック７%含)
23．黒色粘質土　10YR1.7/1(明褐色粘質土10YR6/6ブロック上位50%含)
24．褐色砂混粘質土　10YR4/4～3/4(黄褐色粘質土10YR5/6ブロック１%含)

第４図　調査地断面図

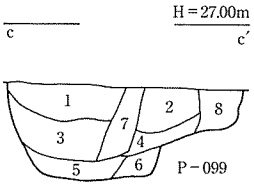




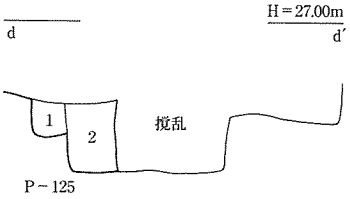
1．黒褐色砂混粘質土　10YR3/1(灰色を帯びる)
2．黒色砂混粘質土　7.5YR2/1(黒色を帯びる)
3．黒色砂混粘質土　7.5YR2/1(褐色を帯びる)
4．黒色砂混粘質土　7.5YR1.7/1



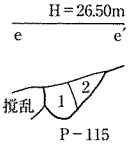
1．黒褐色細砂　10YR2/2
2．黒色粘質土　10YR1.7/1(褐色を帯びる、黄褐色粘質土10YR5/6ブロック３％含)
3．黒色粘質土　7.5YR1.7/1(褐色を帯びる)
4．黒色砂混粘質土　10YR2/1(褐色を帯びる)
5．にぶい黄褐色細砂　10YR5/4



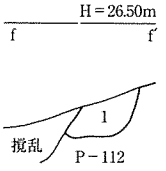
1．黒色粘質土　10YR1.7/1(灰色を帯びる)
2．黒色砂混粘質土　7.5YR2/1
3．黒色粘質土　10YR1.7/1(黒色強い)
4．黒色粘質土　7.5YR2/1(褐色を帯びる)
5．黒色砂混粘質土　7.5YR2/1(黄褐色粘質土10YR5/6ブロック15％含)
6．黒色砂混粘質土　7.5YR2/1
7．黒色粘質土　10YR1.7/1(黄褐色粘質土10YR5/6ブロック７％含)
8．黒褐色粘質土　10YR2/2(黄褐色粘質土10YR5/6ブロック２％含)



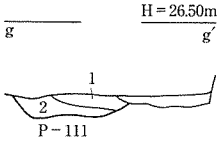
1．黒色砂混粘質土　7.5YR1.7/1
2．黒色砂混粘質土　7.5YR2/1(褐色を帯びる)



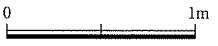
1．黒色粘質土　7.5YR1.7/1
2．黒色粘質土　7.5YR2/1(黄褐色粘質土10YR5/6ブロック５％含)



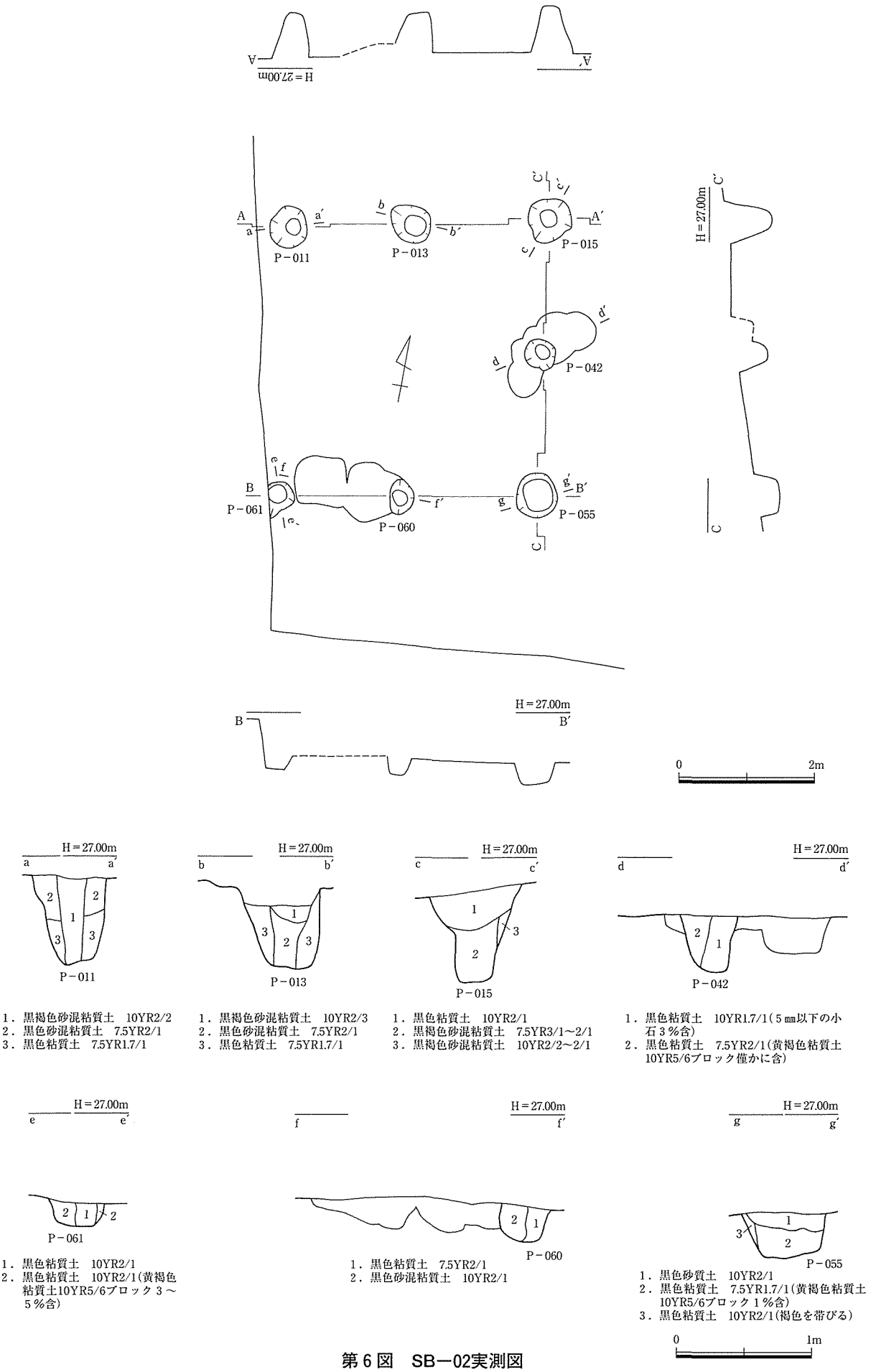
1．黒色砂混粘質土　7.5YR1.7/1(黄褐色粘質土10YR5/6ブロック３％含)



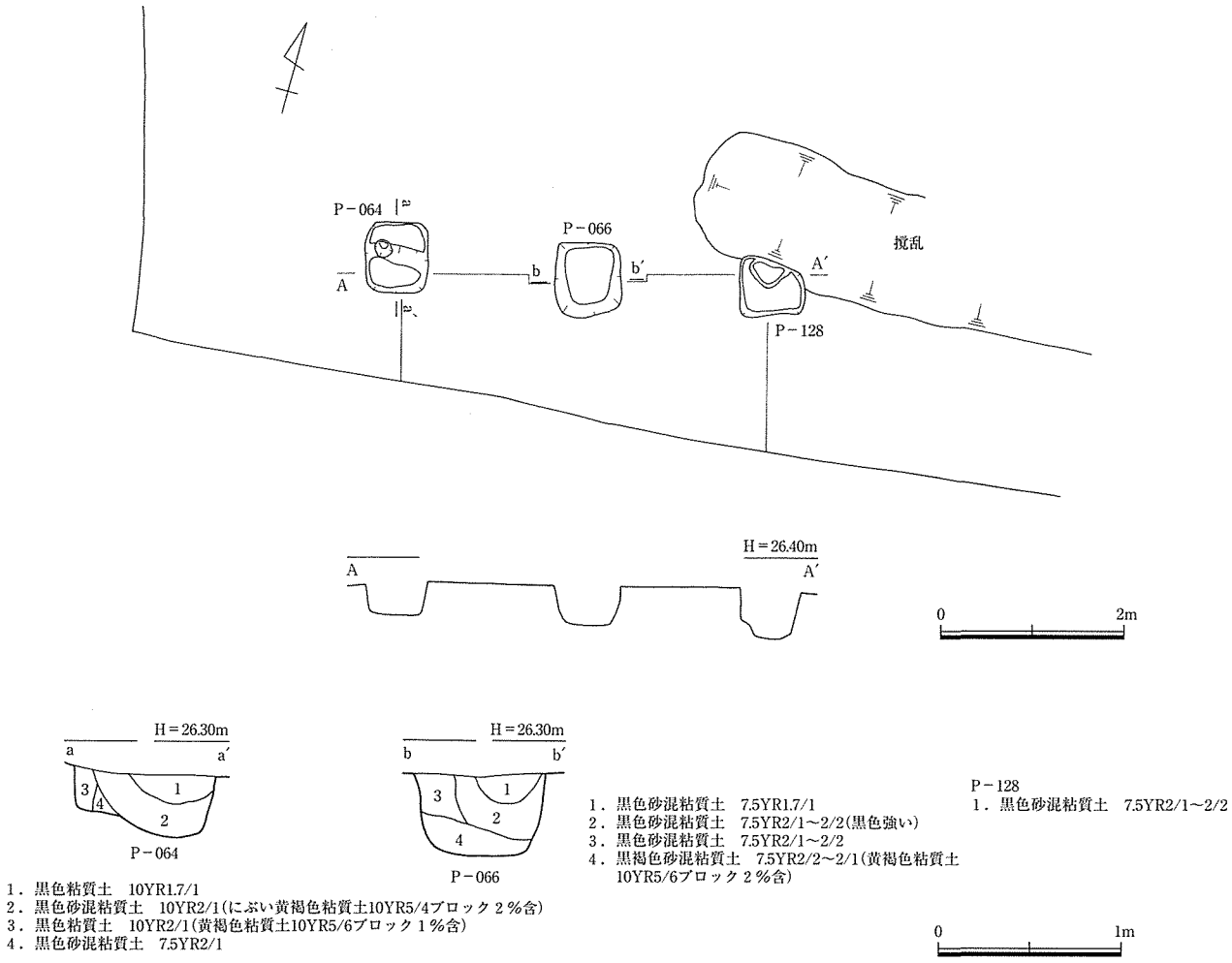
1．黒褐色粘質土　10YR2/2～2/3
2．黒褐色粘質土　10YR2/3(黄褐色粘質土10YR5/6ブロック５％含)



第５図　SB－01実測図


H=27.00m
A
A′
P-011
P-013
P-015
P-042
P-061
P-060
P-055
B
B′
C
C′
0
2m
1．黒褐色砂混粘質土　10YR2/2
2．黒色砂混粘質土　7.5YR2/1
3．黒色粘質土　7.5YR1.7/1
1．黒褐色砂混粘質土　10YR2/3
2．黒色砂混粘質土　7.5YR2/1
3．黒色粘質土　7.5YR1.7/1
1．黒色粘質土　10YR2/1
2．黒褐色砂混粘質土　7.5YR3/1～2/1
3．黒褐色砂混粘質土　10YR2/2～2/1
1．黒色粘質土　10YR1.7/1（5㎜以下の小石3％含）
2．黒色粘質土　7.5YR2/1（黄褐色粘質土10YR5/6ブロック僅かに含）
1．黒色粘質土　10YR2/1
2．黒色粘質土　10YR2/1（黄褐色粘質土10YR5/6ブロック3～5％含）
1．黒色粘質土　7.5YR2/1
2．黒色砂混粘質土　10YR2/1
1．黒色砂質土　10YR2/1
2．黒色粘質土　7.5YR1.7/1（黄褐色粘質土10YR5/6ブロック1％含）
3．黒色粘質土　10YR2/1（褐色を帯びる）
0
1m

第6図　SB－02実測図



第７図　SB－03実測図

と02、SB－03と04に二分できる。SB－01と02は並列しており、柱筋の間隔で2.4m程度しか離れておらず、同一の建物である可能性も否定できない。SB－03と04は柱穴の平面形が四角形状を呈しており、SB－01・02とは様相を異にする。時期差や建物の性格の違いが考えられるが詳細は不明である。

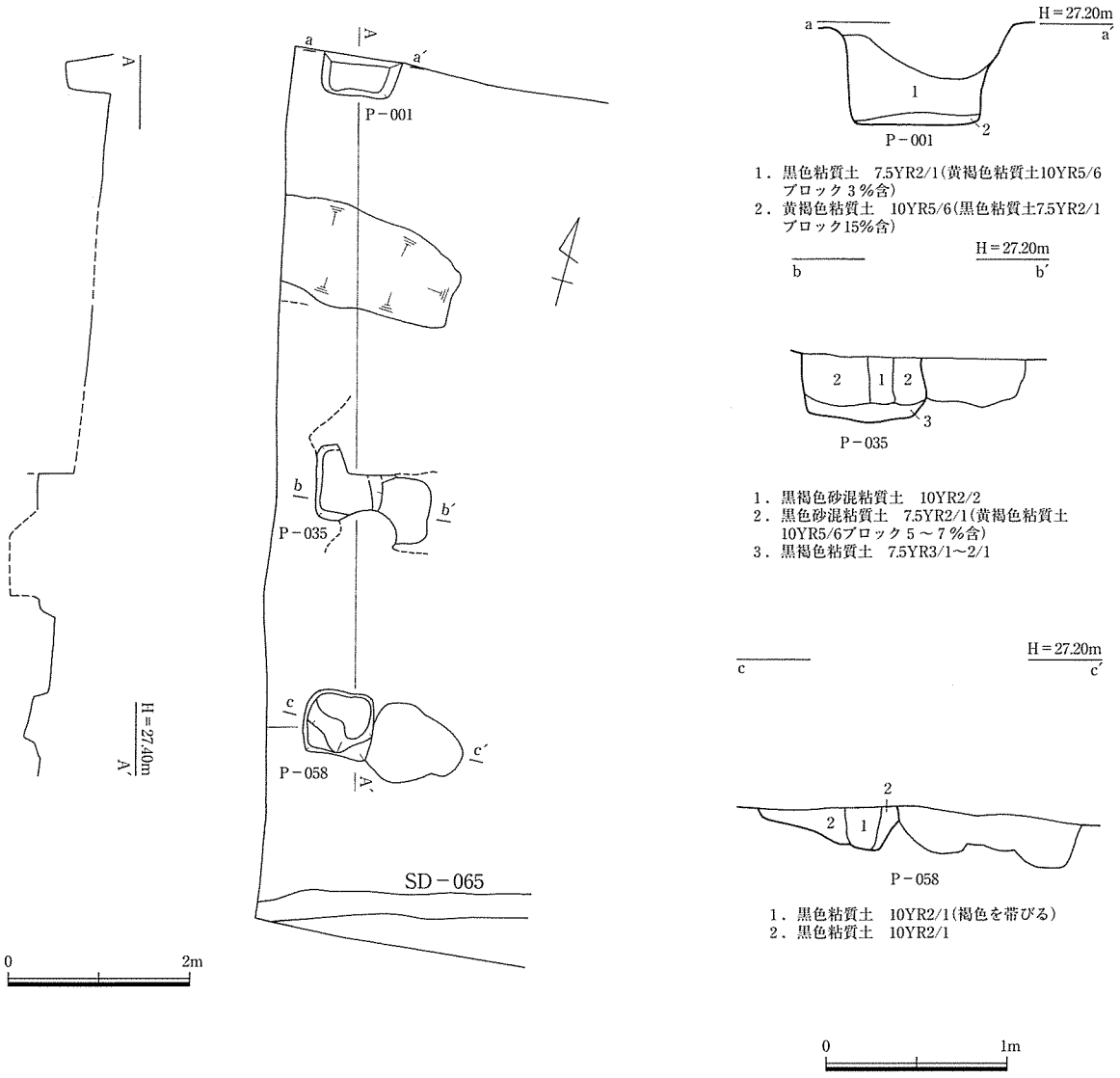
SB－01(第５・９図、図版４・５・13)

調査地の中央東寄りに位置する。東側は調査区外へと延びる可能性がある。現況で桁行３間以上、梁行２間の建物である。主軸をN－77°－Eにとる。建物の平面形は長方形を呈し、桁行３間が7.42m、梁行２間が4.20mを測り、面積は31.16m²となる。柱間寸法は桁行が241～260cm、梁行が199～221cmを測り、平均すると、桁行248.6cm、梁行213.67cmとなる。柱穴の平面形は円形、楕円形。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴(Ｐ－076、099、115)も存在し、その径は14～18cm程度である。柱穴底面の標高は25.89～26.23mと34cm程度の範囲内でほぼ一定である。

主な遺物はＰ－112から土師器甕の口縁部(１)が出土している。

SB－02(第６図、図版６・７・８)

調査地の中央西寄りに位置する。西側は調査区外へと延びる可能性がある。現況で桁行２間以上、梁行２間の建物である。主軸をN-80°－Eにとる。建物の平面形は長方形を呈し、桁行２間が3.98m、梁行２間が4.01mを測り、面積は15.96m²となる。柱間寸法は桁行が183～213cm、梁行が190～211cmを測り、平均すると、桁行194.0cm、梁行200.5cmとなる。柱穴の平面形は円形、楕円形。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴(Ｐ－011、013、015、042、061、060)も存在し、その径は16～26cm程度である。柱穴底面の標高は25.91～26.17mと26cm程度の範囲内でほぼ一定である。



第８図　SB－04実測図

何れの柱穴内からも図化に堪え得る遺物は出土しなかった。

SB－03(第７・10図、図版９・13)

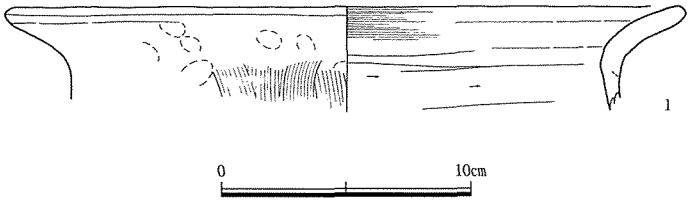
調査地の南西寄りに位置する。南側は調査区外へと延び、西側は３間以上延びる可能性がある。桁行２間、梁行不明の建物である。主軸をN-76°-Eにとる。桁行２間は4.14mを測り、柱間寸法は207cmを測る。柱穴の平面形は四角形状を呈す。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴はなかった。柱は抜取られ、再利用された可能性が高い。柱穴底面の標高は25.51～26.75mと24cm程度の範囲内でほぼ一定である。

主な遺物はＰ－066から須恵器高台付杯の底部(2)が出土している。

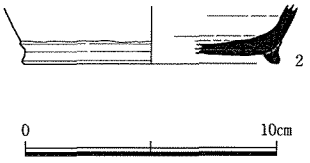
SB－04(第８図、図版９・10)

調査地の西寄りに位置する。西側は調査区外へと延び、南北にも延びる可能性がある。桁行３間以上、梁行不明の建物である。主軸をN-15°-Wにとる。桁行３間は7.28mを測り、柱間寸法は265cmを測る。柱穴の平面形は四角形状を呈す。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴(Ｐ－035、058)も存在し、その径は14～20cm程度である。柱穴底面の標高は26.00～26.43mと多少不均衡である。

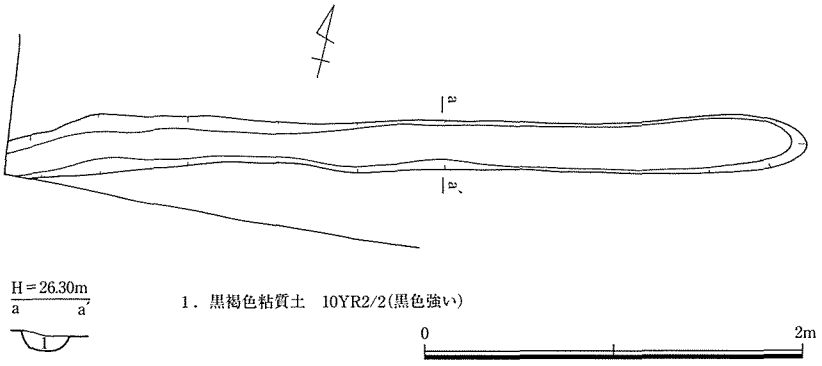
何れの柱穴内からも図化に堪え得る遺物は出土しなかった。



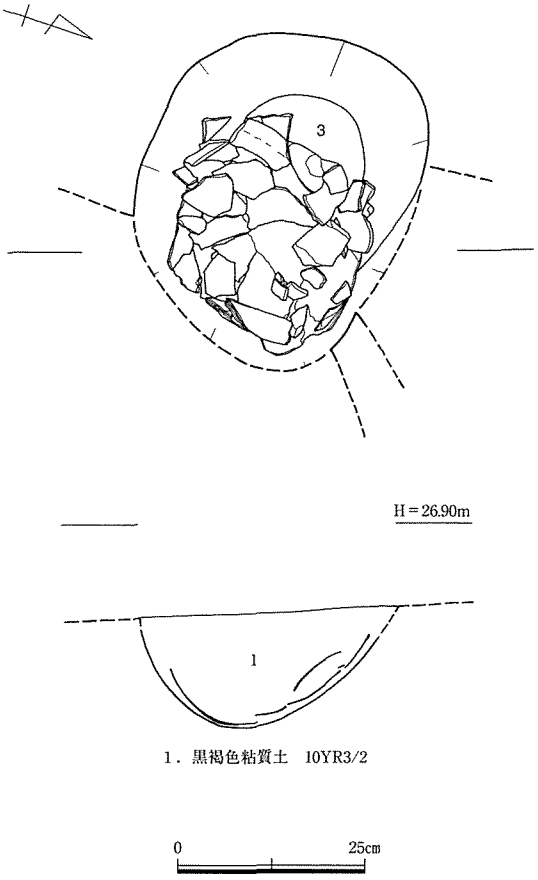
第９図　SB－01出土遺物実測図



第10図　SB－03出土遺物実測図



第11図　SD－065実測図



第12図　P－024実測図

２．溝状遺構

今回の調査で検出した溝状遺構は僅か２条のみである。内、１条は近現代の所産と考えられる。

SD－065（第11図、図版10）

調査地の南西端に位置する。西側は調査地外へと延び、東端は収束する。検出面での規模は検出長4.26m、幅21～31.5cm、深さ11cmを測る。主軸をN-75°-Eに有する。埋土は単一層で、黒褐色粘質土10YR2/2である。主軸、位置関係からSB－02、SB－04に伴う溝であると考えられるが詳細は不明である。

SD－010

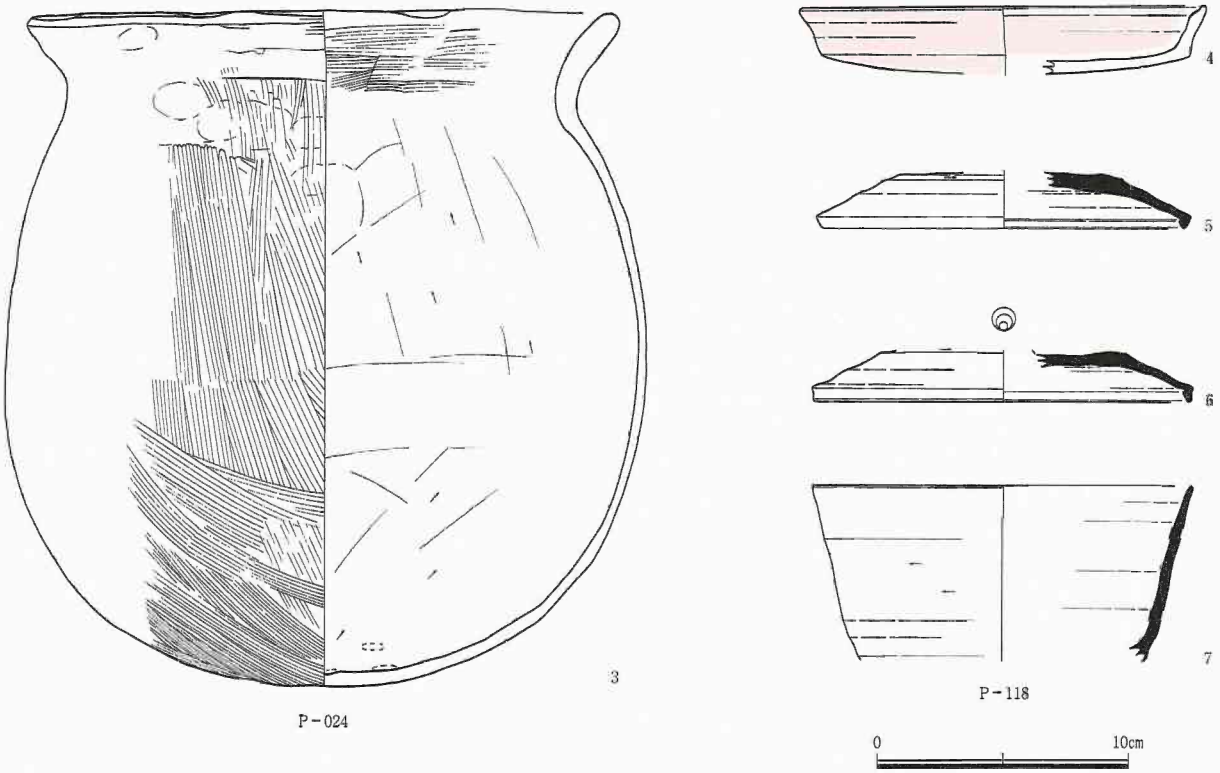
肥料穴SK－014と同心円上に位置しており、014に伴う溝と考えられる。

３．土坑状遺構

明確に土坑と断定できる遺構はほとんど無い。Ｐ－118や124はその規模などから土坑とも考えられるが明確ではない。埋土の堆積状況からはピット（柱穴）と理解した方が無難であろう。Ｐ－118からは、須恵器蓋・杯、土師器盤など比較的多く遺物が出土しており、他のピット（柱穴）とは様相を異にする。

SK－014

規模、埋土状況から果樹園であった頃の肥料穴もしくは樹木抜取り穴と考えられる。



第13図　ピット内出土遺物実測図

4．ピット(柱穴)

大小様々な規模が存在し、平面形は円形、楕円形、不整円形でほとんどを占める。建物を構成すると考えられるものは2割弱の22基である。大きさは20～100cm程度、50～80cm程度のものが最も多い。明確に四角形状を呈するものは1割以下の9基程度である。比較的、調査地の中央、標高26.5～27.1m付近に集中する。埋土は黒色、黒褐色系の粘質土である。複雑に重複するものも存在するが、平面検出において新旧関係を捉えることは困難であった。

P－024(第12・13図、図版10・13)

特筆すべきは、調査地中央やや北西よりに位置するP－024である。024は025、と重複するが新旧関係は不明である。主軸をN-86°-Wに有し、推定長45cm、幅35cm、深さ13.5cmを測る。ピット内には甕(3)の口縁部を西に横位状態で据え置く。上面の削平、土圧で損壊はしているが本来は完形であったと考えられる。埋土は単一層で黒褐色粘質土10YR3/2である。SB－01の北西隅に位置することから関連も考えられるが、詳細は不明である。

Ⅳ．出土遺物(第9・10・13・14図、図版13～15)

遺物は土器類(土師器、須恵器、陶磁器)のみが出土している。総体的に細片が多く、遺構内遺物は数が少ない。遺構内からはSB－01(P－112)、SB－03(P－066)、P－024、P－118から出土した遺物を図化した。また遺構外出土から遺存状態の良好なものを8点、図化している。

(1)はSB－01を構成するP－112から出土している。土師器甕の口縁部で1/12が遺存する。推定口径は26.2cmとなる。口縁部は大きく外傾し、端部は丸い。体部外面、縦ハケ目。口縁部内面、横ハケ目。頸部ナデ、以下ヘラ削り。色調はにぶい黄橙色を呈す。

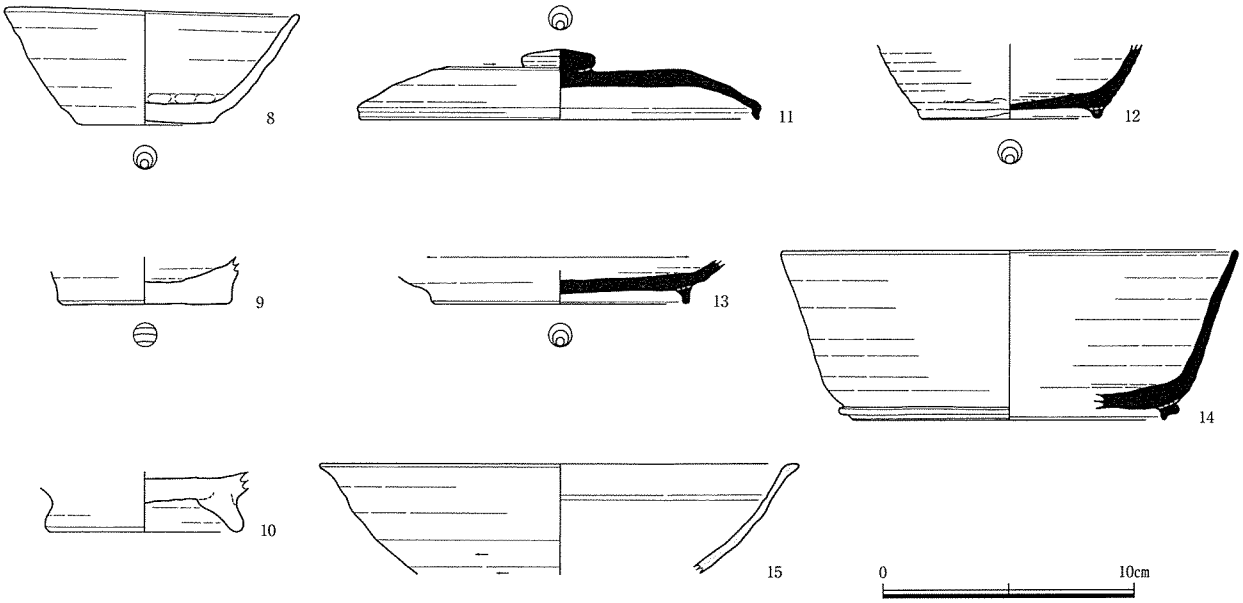
(2)はSB－03を構成するP－066から出土している。須恵器、高台付杯の底部で1/6が遺存している。復元底径は10.0cm。高台部は短く「ハ」の字状に開く。

(3)はP－024から出土している。土師器甕で肩部を1/4欠失するが、ほぼ完形に近い。口縁部は歪んでおり、径は22.6～23.7cm、最大胴径は25.4cm、器高は26.5cmとなる。口縁部は外傾して開き端部は丸い、所謂「く」の字状口縁。体部中位に最大径を有する。調整は体部外面、頸部以下ハケ目、内面は口縁部横ハケ目、頸部以下ヘラ削り。黒斑有り、煤付着。

(4～7)はP－118から出土している。(4)は土師器の盤、赤彩を施す。底部は1/3が、口縁部は一部のみの遺存。推定口径は15.8cmとなる。口縁部は体部から屈曲、外反し端部で上外方へ摘み出す。内外面ともにナデ調整。(5・6)は須恵器の蓋、ともに1/4が遺存している。復元口径は(5)が14.2cm、(6)が14.8cmとなる。(5・6)ともに天井部の調整は、逆時計回りのヘラ削り、後ナデ。(6)は回転糸切痕を有す。(7)は須恵器杯、1/4が遺存する。復元口径は14.9cmとなる。口縁部は直線的に外傾し、端部で先細る。体部外面、ヘラ削り、後下位ナデ。

(8～15)は遺構外からの出土。(8)は土師器杯、底部外面に回転糸切痕を有する。口縁部1/4遺存、底部完存。復元口径11.4cm、底径5.4cm、器高4.6cmとなる。口縁部は底部から直線的に開き、端部は丸い。内外面ともに横ナデ、底部内面に指頭圧痕。(9)は土師器底部。底径6.4cmを測る。外面に静止糸切痕を有す。内外面ともに横ナデ。(10)は土師器底部、高台を有す。1/2が遺存、底径7.4cmを測る。高台部は「ハ」の字状に開き、端部は丸い。(11)は須恵器蓋、擬宝珠形のつまみを有する。天井部はほぼ遺存するが、口縁部は1/8のみ遺存。推定口径15.7cm、器高2.8cmとなる。天井部は回転糸切痕が認められる。つまみ周縁部横ナデ、逆時計回りのヘラ削り。内面不定方向のナデ。(12)は須恵器、高台付杯底部。1/3が遺存する。復元底径6.9cmとなる。(13)は須恵器底部、高台を有す。底径9.9cmを測る。糸切痕を有す。高台部は下方に短く納める。(14)は須恵器、高台付杯。口縁部1/6、底部1/3が遺存する。復元口径17.9cm、底径12.1cm、器高6.7cmとなる。体部は直線的に外傾し、口縁端部は丸い。底

部と体部の境界は丸みを帯びる。(15)は灰釉陶器の碗。1/4が遺存する。復元口径18.9cmとなる。口縁部は内湾気味に立ち上がり端部で外方へ摘み出す。外面体部下半ヘラ削り。色調は胎土が褐灰色、施釉部はオリーブ灰色を呈す。試掘調査でも別個体片が出土している。



第14図　遺構外　出土遺物実測図

V. まとめにかえて

はじめに、野坂遺跡の時期を遺物から概観すると、奈良時代末期から平安時代前半(8世紀末～11世紀)頃と考えられる。当遺跡は比較的、遺物の時期幅が限定されるものの、出土する器種は限定され、掘立柱建物を中心とする集落遺跡の特徴でもある出土遺物の量が少ないことなどから詳細な遺構の時期を分析することは困難であるが、概ね平安時代が中心と考えられる。掘立柱建物は何れも主軸が5°の誤差内に納まっており、比較的整然と配置されていたものと考えられる。当地は古代山陰道の推定通過地付近でもあることから、相応の集落、施設などの性格も考えられる。出土遺物上からは特別な性格を読み取ることはできないが、同時期の遺跡では比較的出土例が少ない灰釉陶器が数点出土している。

調査地は河岸段丘上に位置しており、同じ左岸の下流に存在する大桷遺跡、対岸の下段遺跡、小森山遺跡との関連も重要となる。なかでも小森山遺跡は当遺跡と時期的に一致することから興味深いが、下段遺跡とともに発掘調査は実施されておらず、詳細は不明である。

調査地は既存の遺跡地図から野坂遺跡の西限に位置するが、今回の調査では遺跡はさらに西方に広がる様相を呈しており、遺跡の範囲確定には今後注意が必要である。また、付近に近代の窯跡が存在する様に北側の丘陵地においても生産遺跡などの存在の可能性も考慮した詳細な分布調査も必要である。また、遺跡とは直接的な関わりはないが、当地の土壌は黒色が強く、火山灰系の土質である可能性が高い。今回は成し得なかったが、古環境復元とともに今後の課題のひとつでもある。

出土遺物観察表

—記載事項について—

挿図番号　遺構ごとの実測番号、図版番号、付図内表示番号を統一して示す。

器　　種　土器は形態的特徴から、皿・甕・杯・盤の呼称を用い、須恵器は蓋・杯・高台付杯の従来の呼称を用いた。部分名称の場合は(　)で表示。

法　　量　土器……口径：①　底径：②　最大胴径：③　器高：④をcmで示す。なお、(　)は復元値。〈　〉は推定値。ただし目安として径の残存が7分の1以下を推定値とした。

形態・手法の特徴　主要部分について記述した。土器については口縁部の内外面ヨコナデ調整を特別な場合以外は省略した。

胎土・焼成・色調

①　胎土　砂粒の大きさとその量を示す。

②　焼成　良好(堅緻)・良(普通)・やや不良(やや軟)・不良(軟)の4段階に分けた。陶磁器については硬質・軟質で表した。

③　色調　主として外面の色調を示すが、内外面が異なる場合(外)・(内)で表示。陶磁器の場合は断面・施釉を(断)・(釉)で表示。

備　　考　赤彩、黒斑、煤、擦り痕の有無等を記載。

遺物登録番号　出土地を調査区分の通し番号で表示。遺物台帳登録番号。

—遺物実測図中における表示—

須恵器：黒塗り　土器回転糸切り：　土器静止糸切り：

陶磁器：　赤彩土器：

土器実測図のヨコナデ調整による稜：　遺物使用痕範囲：

SB－01 〔第９図〕

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
1 P－112	甕	①　〈26.2〉	口縁部は大きく外傾し端部は丸い。	(外)　体部ハケ目。成形時の指頭圧痕。 (内)　口縁部ハケ目痕。頸部ナデ。体部ヘラ削り。	①１～２㎜の砂粒を多く含む ②不良 ③にぶい黄橙色	(口)　1/12		29

SB－03 〔第10図〕

2 P－066	須恵器 高台付杯 (底部)	②　(10.0)	高台部は短くハの字状に開く。	(内外)　横ナデ。 (外)　高台部貼付後横ナデ。底部ナデ。 (内)　底部不定方向へのナデ。	①１㎜以下の砂粒を多く含む ②良 ③(外)灰色 にぶい黄橙色 (内)灰色	(底)　1/6		35

Pit 〔第13図〕

3 P－024	甕	①　最大 23.7 最小 22.6 ③　(25.4) ④　(26.5)	くの字状口縁。口縁部は外傾して開き端部は丸い。体部中位に最大径をもつ。	(外)　体部上半縦ハケ目、斜位ハケ目が重複、下半斜位ハケ目後底部不定方向へのハケ目。頸部粗な横ナデ後口縁端部工具ナデ、軽い横ナデ。成形時の指頭圧痕、頸部に工具圧痕。 (内)　口縁部横ハケ目後横方向へのナデ。頸部ナデ。体部ヘラ削り後軽いナデ。底部ナデ。成形時の指頭圧痕。	①１～２㎜の砂粒を多く含む ４㎜大の砂礫有 ②やや不良 ③橙色　淡橙褐色	(口)　ほぼ1 (肩)　3/4 (底)　ほぼ1	黒班有 煤付着 口縁部歪	8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18
4 P－118	盤	①　〈15.8〉	口縁部は体部から屈曲、外反し端部で上外方へつまみだす。	(内外)　横ナデ後赤彩。 (外)　底部丁寧なナデ。 (内)　底部ナデ。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む ②良 ③黄褐色	(口)　一部 (底)　1/3	赤彩	2 44
5 P－118	須恵器 蓋	①　(14.2)	天井部は膨らみを持って口縁部へ下り端部で屈曲、４は内方へ５は下方へ短く納める。	(内外)　横ナデ。 (外)　天井部１/４を逆時計廻りのヘラ削り、後中央部をナデ。 (内)　天井部不定方向へのナデ。	①0.5㎜前後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③灰色　淡燈褐色	(口)　1/4		44 6
6 P－118	須恵器 蓋	①　(14.8)		(内外)　横ナデ。 (外)　天井部回転糸切り、後外周を逆時計廻りのヘラ削り。後中央部をナデ。 (内)　天井部一方向へのナデ。	①0.5㎜前後の砂粒を多く含む ②良好 ③褐色	(口)　1/4 (天)　1/3		44
7 P－118	須恵器 杯	①　(14.9)	口縁部は直線的に外傾し端部で先細る。	(外)　体部ヘラ削り後下位ナデ。	①0.5㎜前後の砂粒を多く含む ②良好 ③灰色	(口)　1/4 (体)　1/4		2 6 44

遺構外 〔第14図〕

8	杯	①　(11.4) ②　5.4 ④　4.6	口縁部は底面から直線的に開き端部は丸い。	(内外)　横ナデ。 (外)　底部回転糸切り。 (内)　底部ナデ。成形時の指頭圧痕。	①１㎜前後の砂粒を多く含む ２～３㎜の砂粒有 ②やや不良 ③にぶい黄橙色	(口)　1/4 (底)　1	口縁部歪	3
9	(底部)	②　6.4		(内外)　横ナデ。 (外)　底部静止糸切り。 (内)　ナデ。	①１㎜以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③橙褐色	(底)　ほぼ1		1
10	(底部)	②　7.4	高台部はハの字状に開き端部は丸い。	剥落調整不明瞭。	①１㎜前後の砂粒を含む ②良 ③淡橙色	(底)　1/2		4
11	須恵器 蓋	つまみ径　2.9 ①　〈15.7〉 ④　2.8	つまみは擬宝珠形。平坦な天井部から僅かに膨らみを持って口縁部へと下る。端部で屈曲し下方へつまみだす。	(内外)　横ナデ。 (外)　天井部回転糸切り、後つまみ貼付、その周縁部を横ナデ。天井部外周逆時計廻りのヘラ削り。 (内)　天井部不定方向へのナデ。	①１㎜前後の砂粒を多く含む ２㎜の砂粒有 ②良 ③淡灰色	(口)　1/8 (天)　ほぼ1		6
12	須恵器 高台付杯 (底部)	②　(6.9)	高台部は下方へ短く納める。	(内外)　横ナデ。 (外)　底部糸切り後ナデ。高台部貼付後横ナデ。 (内)　底部不定方向へのナデ。	①１㎜以下の砂粒を多く含む ②良 ③灰色	(底)　1/3		2
13	須恵器 (底部)	②　9.9		(内外)　横ナデ。 (外)　底部糸切り。高台部貼付後横ナデ。 (内)　不定方向へのナデ後擦り痕。	①１㎜前後の砂粒を多く含む ２㎜の砂粒有 ②良 ③灰白色～淡灰色	(底)　1	擦り痕	6
14	須恵器 高台付杯	①　(17.9) ②　(12.1) ④　6.7	体部は直線的に外傾し端部は丸い。底部と体部の境界は丸みを帯び凹状の高台部端面を持つ。	(内外)　横ナデ。 (外)　底部ナデ？高台部貼付後横ナデ。 (内)　底部ナデ。	①１㎜前後の砂粒を多く含む ②良 ③(外)暗灰色 (内)灰色	(口)　1/6 (底)　1/3		2 5 6
15	灰釉陶器 碗	①　(18.9)	口縁部は内湾気味に立ち上がり端部で外方へつまみだす。	(内外)　横ナデ後施釉。 (外)　体部下半ヘラ削り。 (内)　口縁部に一条の圏線。	①精緻 ②硬質 ③(断)褐灰色 (釉)オリーブ灰色	(口)　1/4		5

写　真　図　版

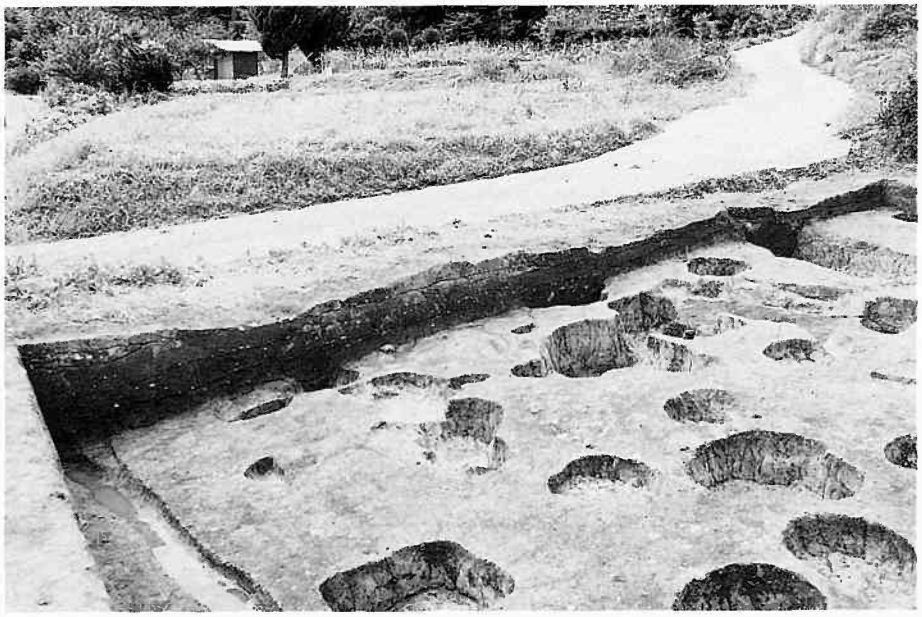
図版 1

調査地遠景
（南西から）

調査前
（西から）

表土除去作業
（東から）

図版 2



西壁断面
（南東から）

南壁断面
（北西から）

南壁断面
（北東から）

調査地全景
（南から）

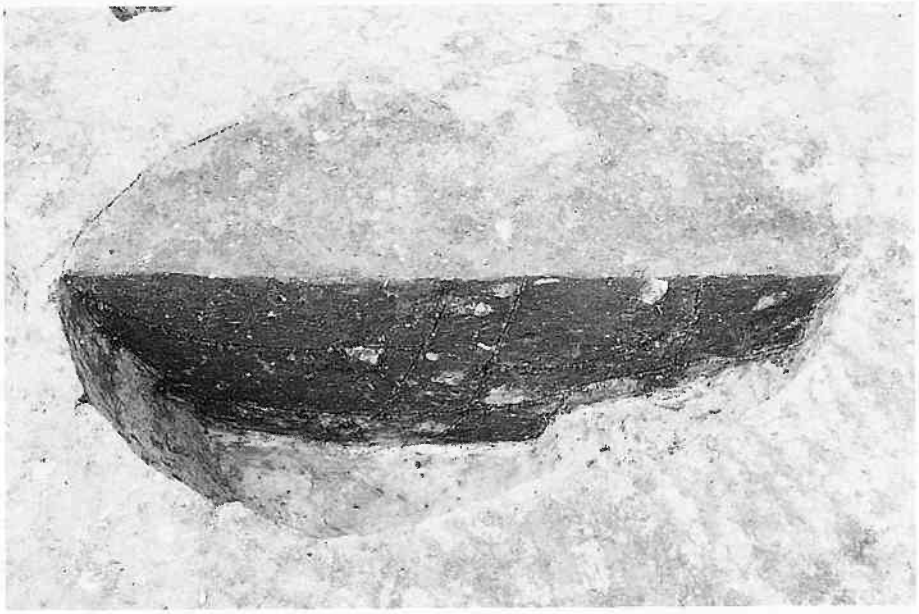
調査地全景
（西から）

調査地全景
（東から）

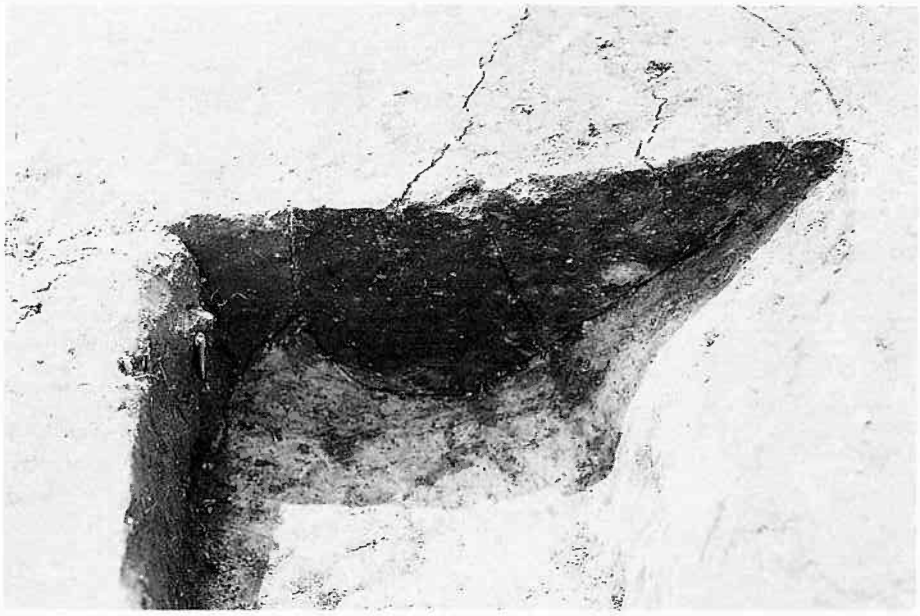
図版 4

SB－01
（南から）

SB－01
P－044断面
（西から）

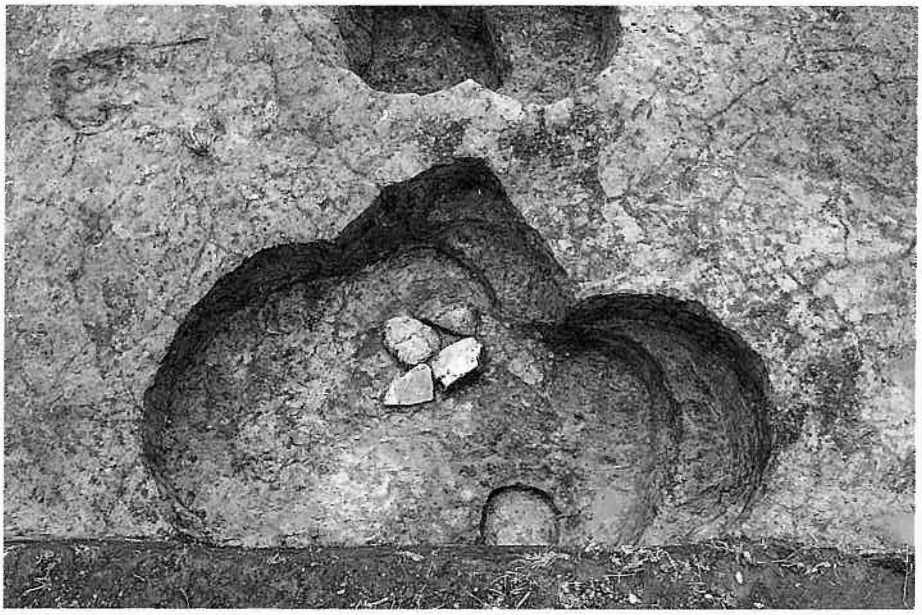


SB－01
P－099断面
（南から）



SB－01
P－115断面
（東から）

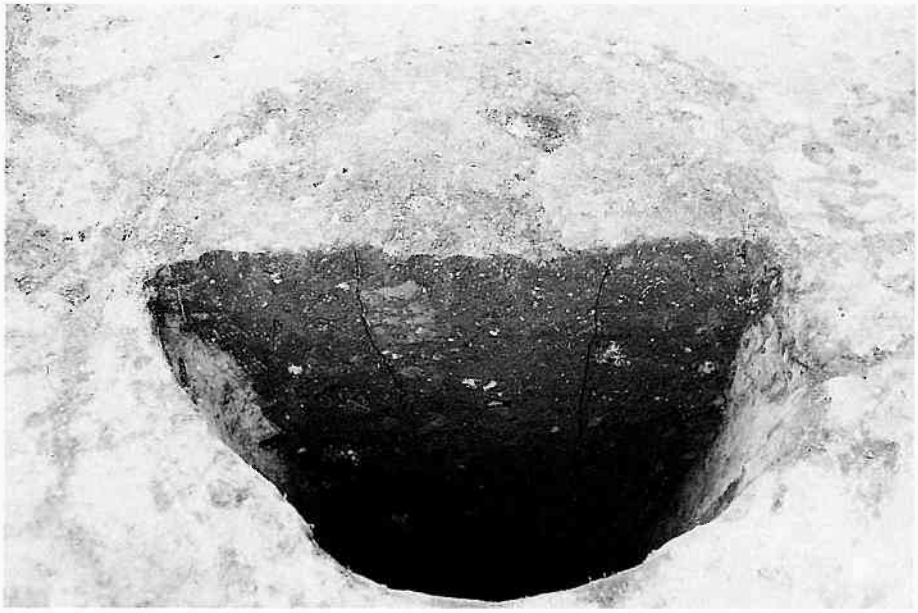
SB－01
P－076完掘状況
（南東から）



SB－01
P－125・126完掘状況
（東から）

図版 6

SB－02
（南から）

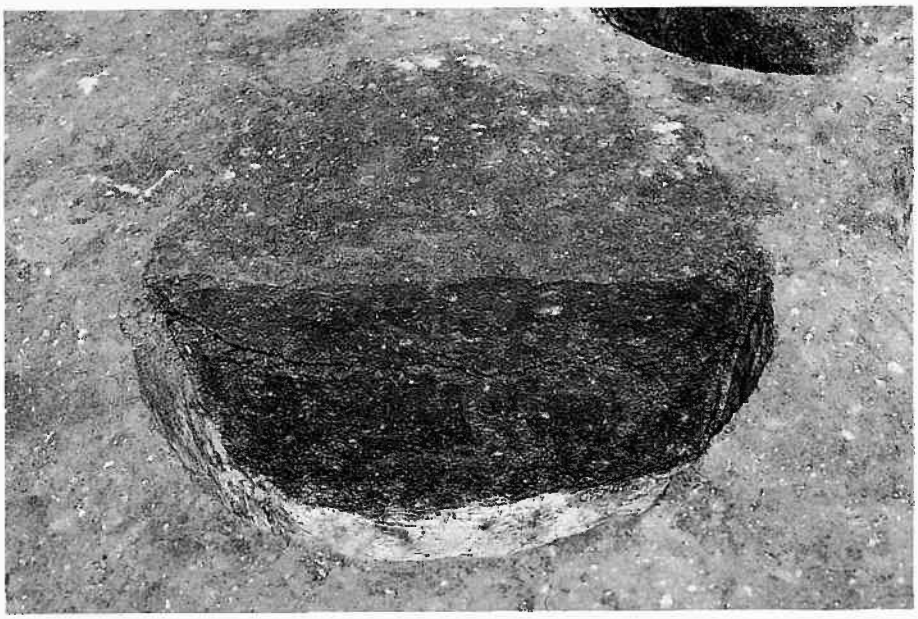


SB－02
P－011断面
（南から）

SB－02
P－013断面
（南から）

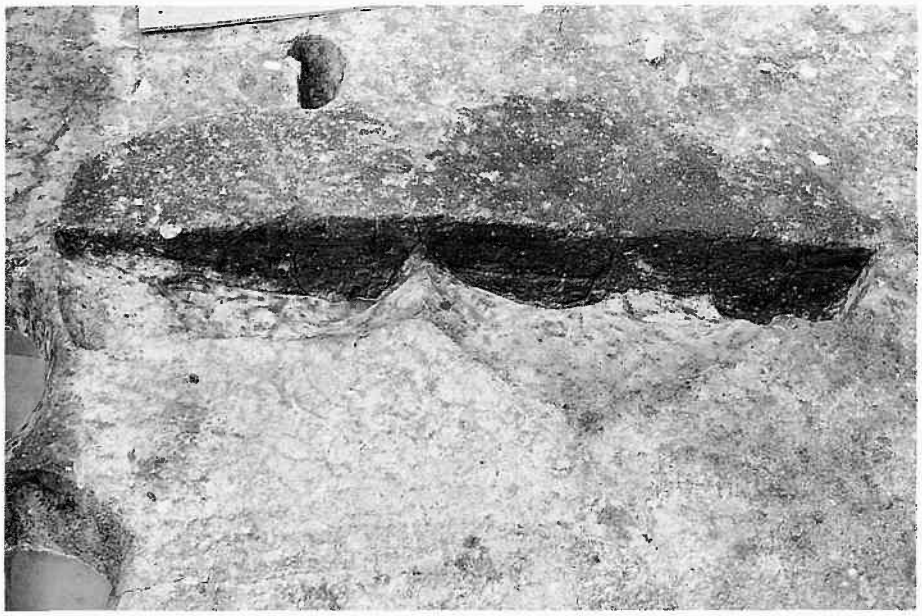
SB－02
P－015断面
（西から）

SB－02
P－061断面
（東から）



SB－02
P－055断面
（南東から）

図版 8

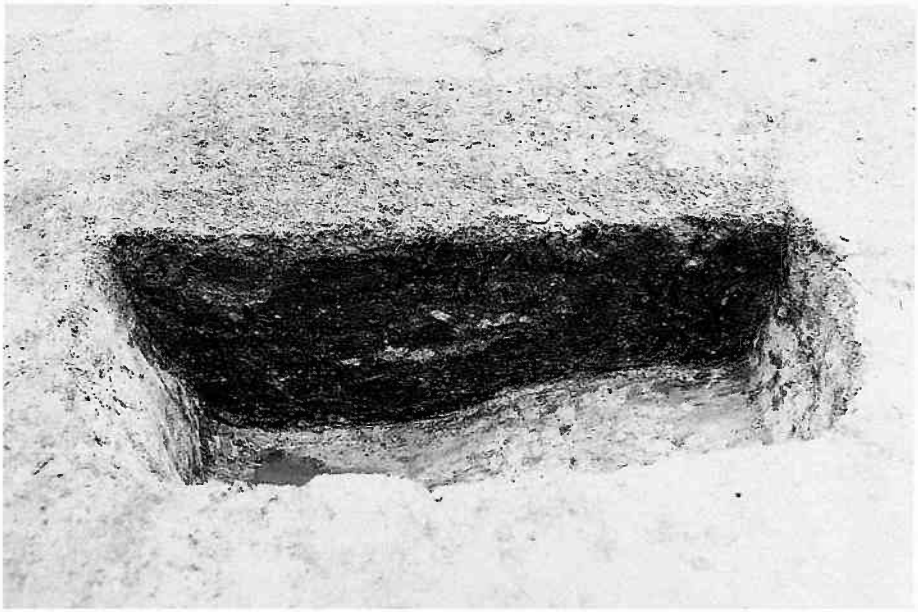


SB－02
P－058～060断面
（南から）

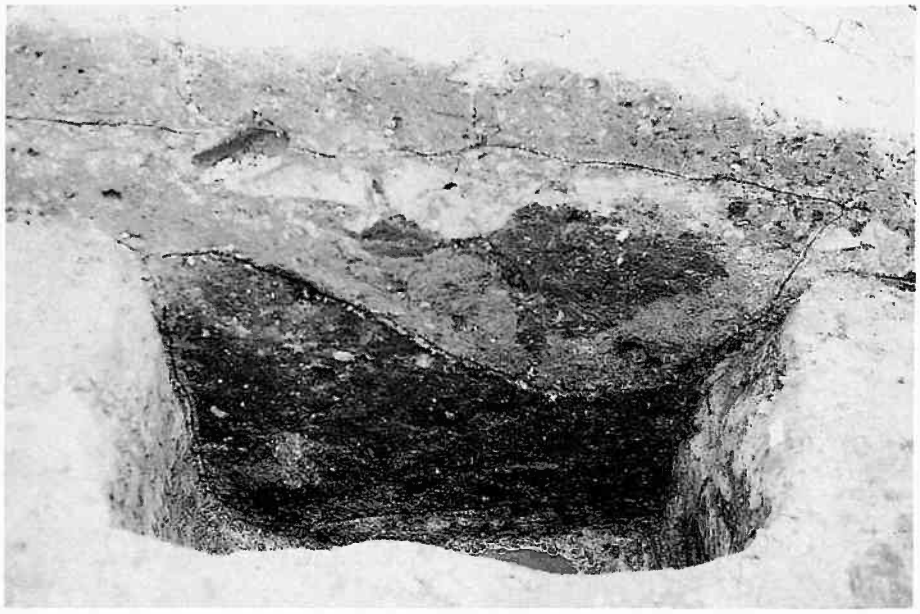
SB－02
P－041～043完掘状況
（南東から）

SB－02
P－058～060完掘状況
（南から）

SB－03
（南から）



SB－03
P－064断面
（東から）



SB－04
P－001断面
（南から）

図版10

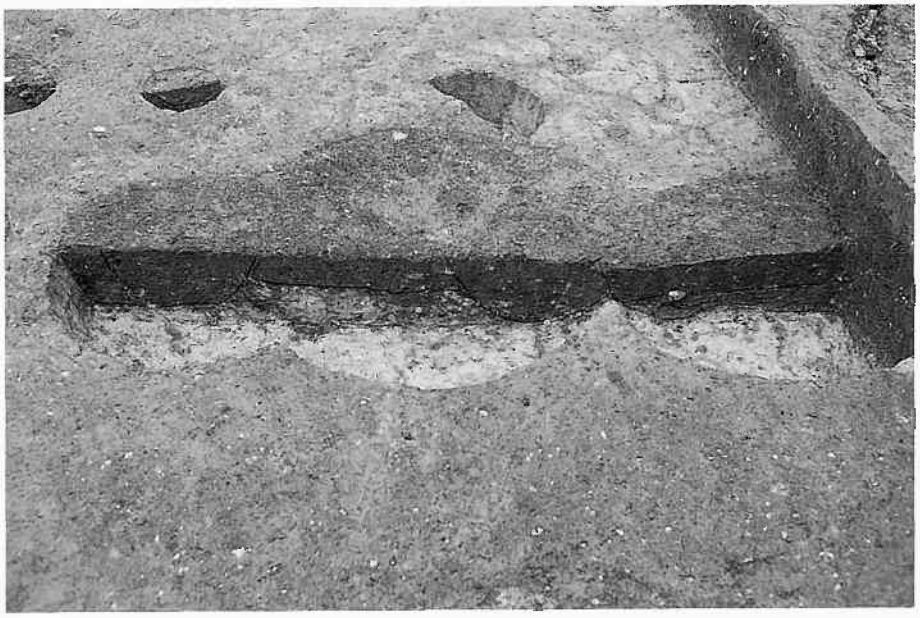
SB－04
P－035断面
（北から）

P－024
遺物出土状況
（東から）

SD－065断面
（西から）

P－007断面
（北から）

P－054断面
（南から）

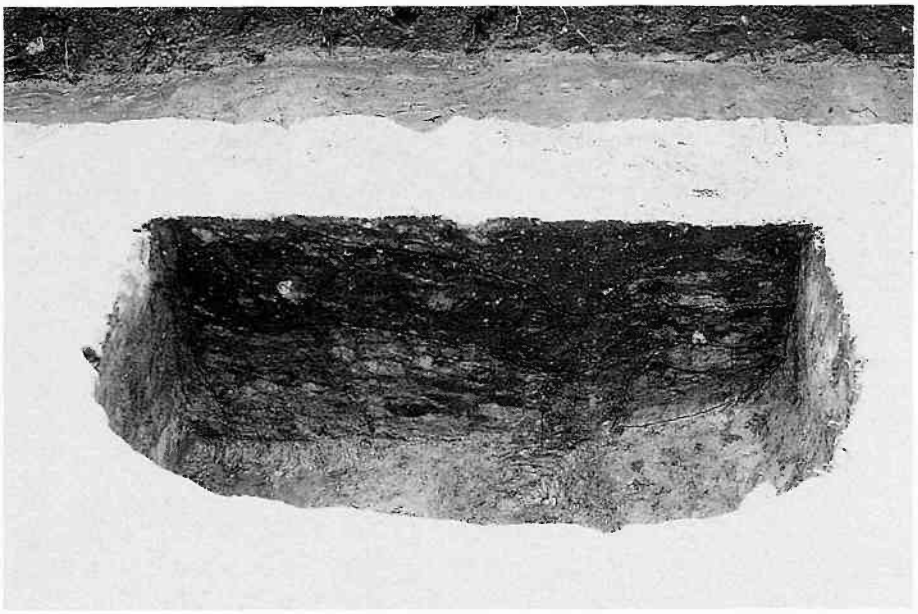


P－047～050断面
（南から）

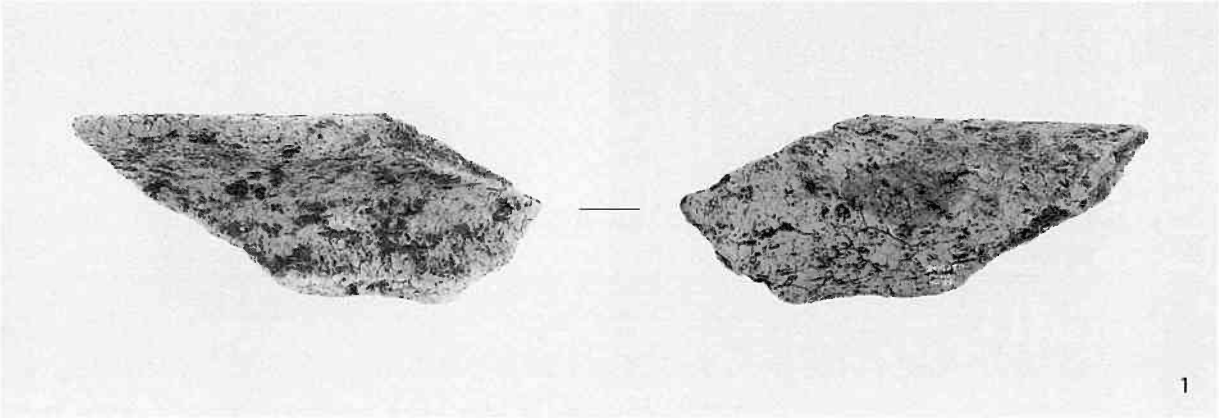
図版12

P－093・130・092断面
（東から）

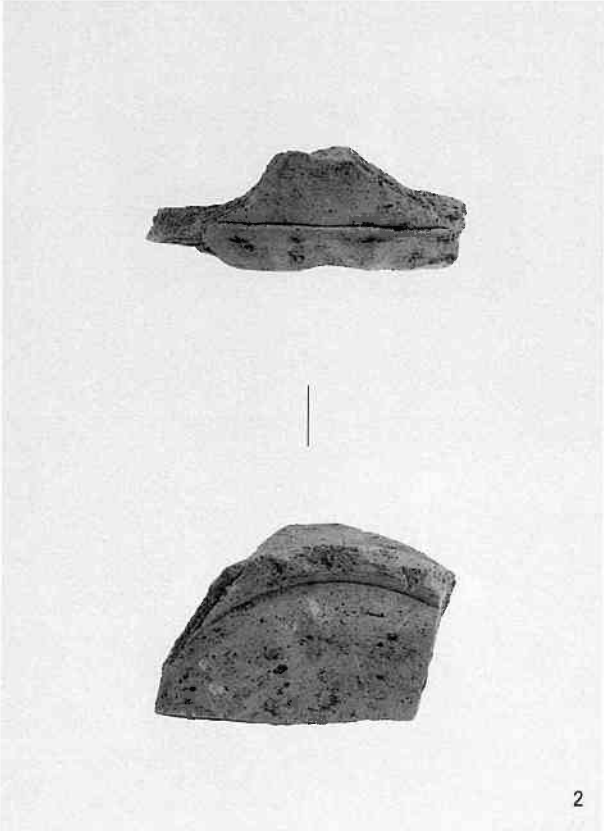
P－095断面
（南東から）



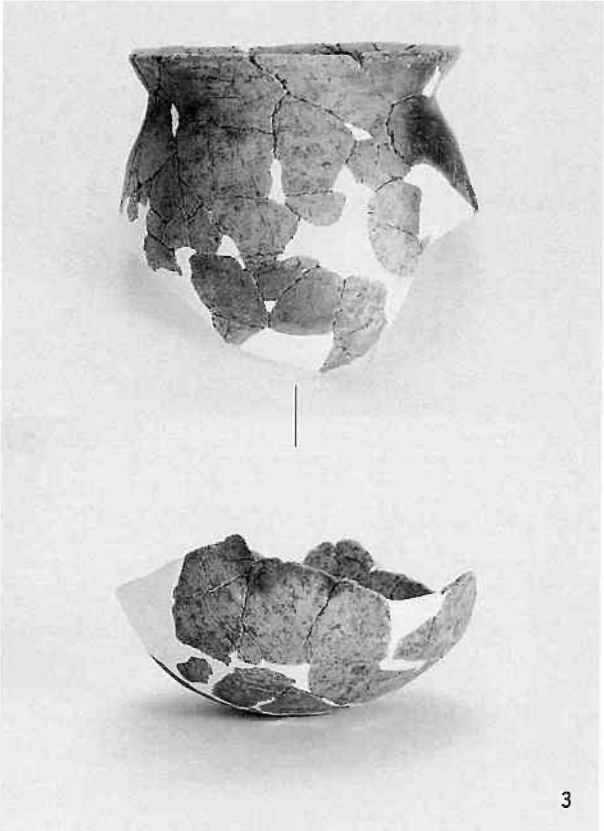
P－119断面
（北から）



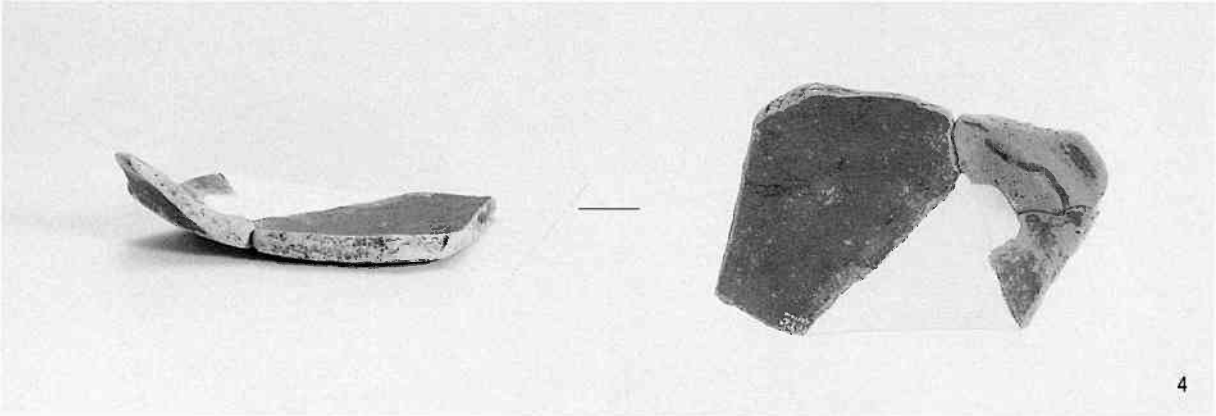
SB－01（P－112）出土遺物



SB－03（P－066）出土遺物

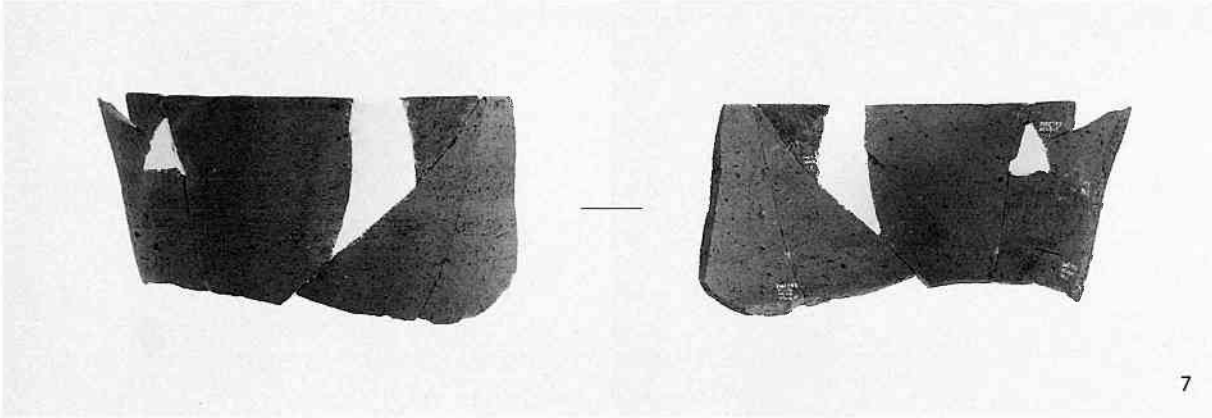


P－024出土遺物

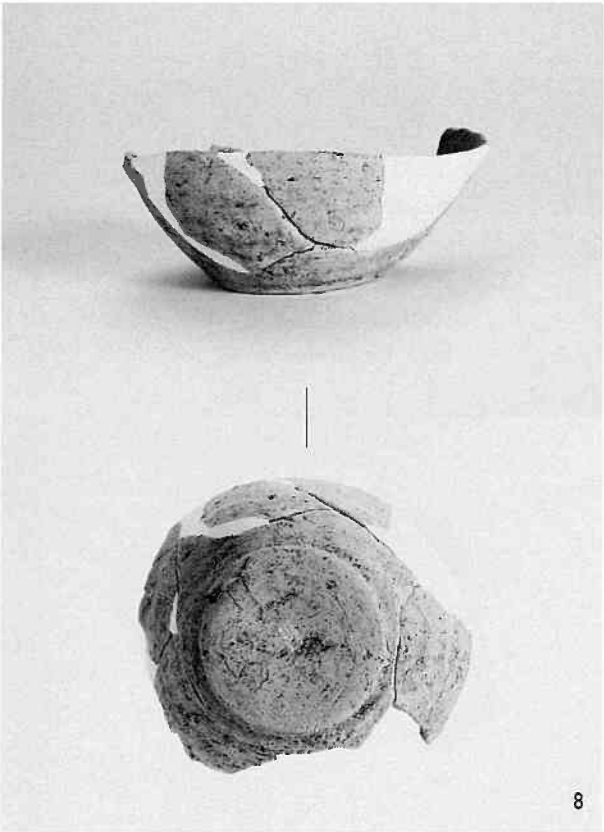


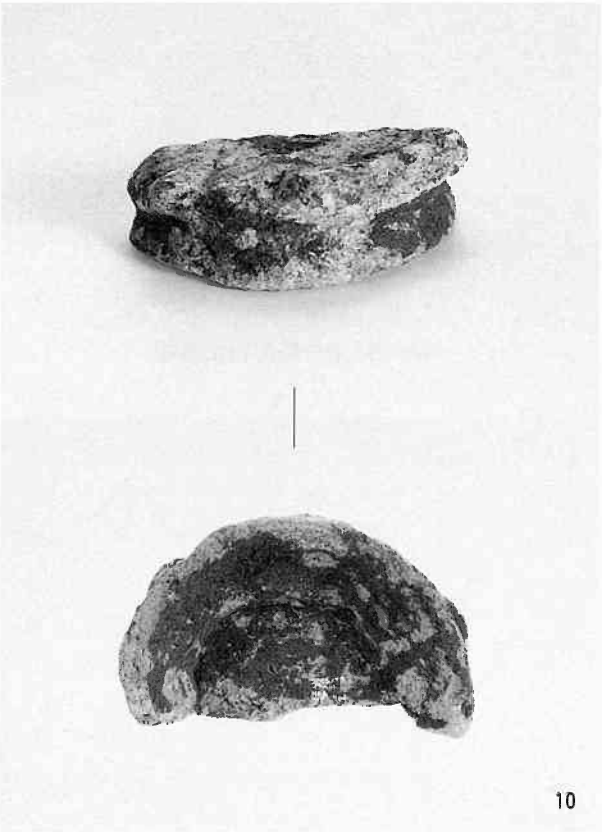
P－118出土遺物①

図版14

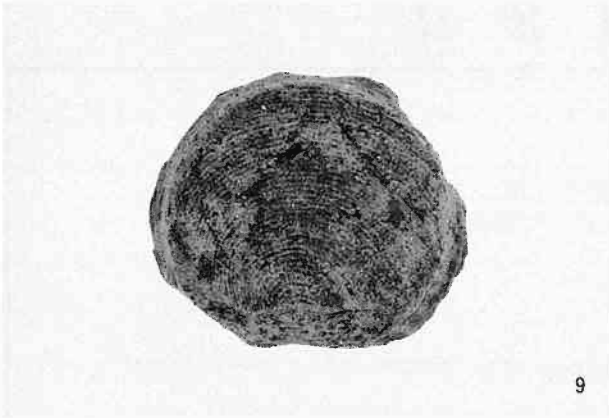


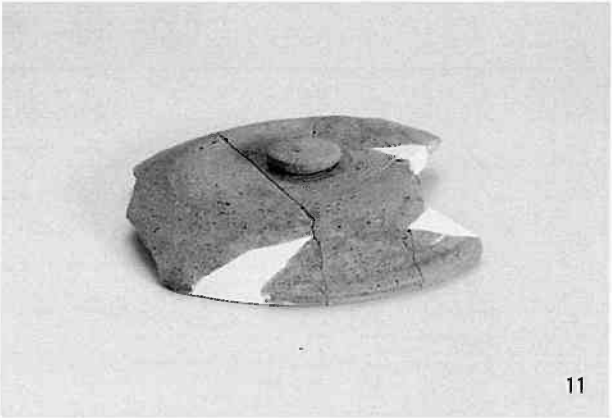
P－118出土遺物②





遺構外出土遺物①

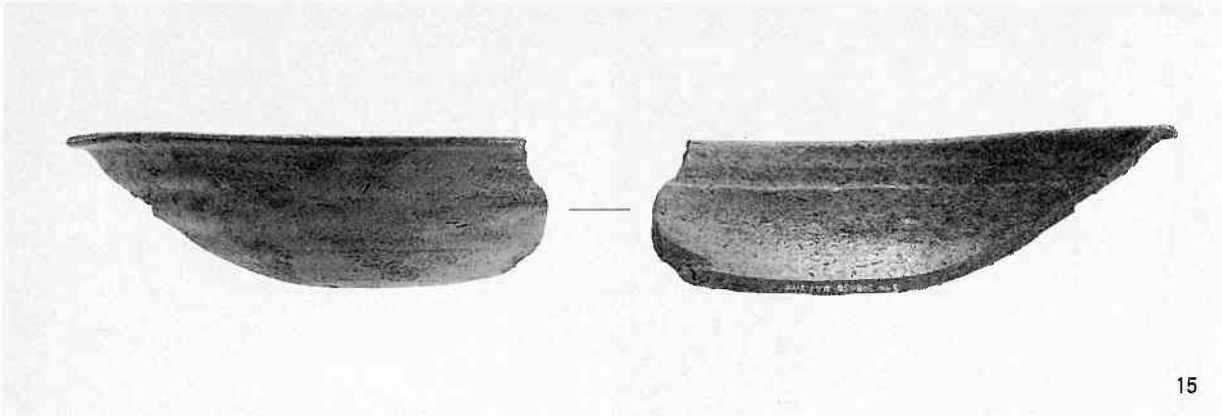

9


11

12

14

13


15

遺構外出土遺物②

報告書抄録

ふりがな	のさかいせき
書名	野坂遺跡
副書名	NTT DoCoMo 鳥取野坂基地局基礎設備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	藤本隆之
編集機関	財団法人　鳥取市文化財団
所在地	〒680-0015　鳥取県鳥取市上町88　　TEL　(0857)23-2410
発行年月日	西暦　2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
野坂遺跡（のさかいせき）	鳥取市（とっとりし） 野坂（のさか）	31 201		35° 29′ 03″	134° 10′ 03″	20050801 ～ 20050831	146㎡	携帯電話基地局基礎設備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野坂遺跡	集落	奈良時代末期 ～ 平安時代前半	掘立柱建物 4棟 土坑　1基 溝状遺構　2条 柱穴、ピット 128基	土師器 須恵器 灰釉陶器	掘立柱建物　4棟

要約

平安時代の掘立柱建物の中心とする集落遺跡。掘立柱建物は主軸が5°以内の誤差に納まっており、整然と配置されていたと考えられる。

当地は古代山陰道の推定通過地付近でもあり、相応の集落や施設などの性格も考えられる。同時期の遺跡からは比較的出土が少ない灰釉陶器が出土している。

調査地は既存の遺跡地図では野坂遺跡の西限に位置するが、さらに西側にも範囲が広がる様相を呈している。

平成17年度

野坂遺跡発掘調査報告書

NTT DoCoMo 鳥取野坂基地局基礎設備工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成18年３月　印刷・発行

編集・発行　財団法人　鳥取市文化財団
印　刷　所　勝美印刷株式会社